

ジェフリー・チョーサー作

『善女列伝』(1)

—性愛に殉じた聖女伝集—

地村彰之・笹本長敬*訳

岡山理科大学教育学部中等教育学科

*大阪商業大学元教授

(2016年10月28日受付、2016年12月5日受理)

チョーサーについて

チョーサーとヨーロッパ大陸との係りについて簡潔に辿ってみる。チョーサーは1343年頃(1340年?) ロンドンの裕福なワイン商人の家に生まれる。成人に達してからフランスとイタリアへ何度も派遣される。エドワード3世軍のフランス侵攻に従軍したアルスター伯爵夫人の夫であるライオネル・アントワープ(第1代クラレンス伯)に仕えて敵国フランスへ渡航する。ランスで捕虜になり、16ポンドの身代金によって1360年3月1日に釈放される。1362年になって、これまでフランス語が公的言語であった英国議会において英語によって開会が宣せられる。1362年フランドル地方出身の年代記作者、詩人ジャン・フロワサル(Jean Froissart 1337?-1410)が英国を訪問する。1366年王命により3名の連れとともにスペイン旅行をする。1368年5月主人であるライオネル王子がガレアツォ1世・ヴィスコンティの娘のヴィオランテと再婚する。ミラノで行われた婚儀(ペトラルカも出席)にチョーサーが出席していた可能性が有る。1368年7月17日チョーサーがドーバー海峡を渡ったという。1372年12月1日イタリア旅行の前渡し金66ポンド13シリング4ペンス受領し、ロンドンを立ってイタリアへ向かう。ジェノヴァでの貿易の取り決めをする。1373年ジェノヴァからフィレンツェへ行く。1377年国王特使として英仏和平交渉をする。1378年リチャード2世の密命でミラノへ行き、ヴィスコンティ家と傭兵隊長ジョン・ホークウッドと接触し、財政と軍事(傭兵雇い入れ)面での交渉をする。1384年から1385年にかけて『トロイルスとクリセイデ』に哲学的な色調を加えるために、修正する。1386年ごろ『善女列伝』を書き始める。1387年ごろ『カンタベリー物語』を書き始め、生涯続ける。そして、チョーサーは1400年10月25日に亡くなる。

『善女列伝』では、愛のために殉死し、その結果愛の神のもとで列聖になるのに相応しい女性たちの物語を語っている。この物語には愛に殉じた女性たちについて物語るといふ枠が設定されている。さらに、いかにこの物語が書かれるようになったかを説明する「プロローグ」が設けられ、これもその枠の中に置かれている。『カンタベリー物語』に通じる枠組みである。

『善女列伝』のFテキストの「プロローグ」では、ZeusつまりJupiterが牡牛(bull)の姿になり、魅了された“Agenores doghtre”(つまりEuropa)をクレタ島に連れて行ったこと、ZephrがFloraに魅了されてFloraを奪ったことなど『善女列伝』で紹介される。前者はEuropeという大陸名として残り、後者は「植物相」特にthe goddess of flowerであり、flowerという名前に残る。悲劇の女性たちの話にとどまらず、チョーサーが好んだ4月や5月の春の描写へと繋がっていくことは、チョーサーの文学に深い影響を与えたことがわかる。

チョーサーが用いた詩形を指摘することは重要である。『トロイルスとクリセイデ』が帝王韻詩(ababbcc)であるのに対して、『善女列伝』は英雄詩体二行連句(aabbcc...)になっている。後者が『カンタベリー物語』に繋がっていく詩形であることを考えると、チョーサーが最後に作品を完成するために影響を受けた詩形の試みが『善女列伝』で実践されたことが分かる。なお、『カンタベリー物語』では、英雄詩体二行連句が主流であるが、帝王韻詩なども用いられていることは忘れてはならない。ヨーロッパ大陸から受けた詩形を最大限に活用したものが『カンタベリー物語』であったと言ってもよいのではないか。

プロローグ (F版)

天国に喜びがあり、地獄には悲しみがあると
人が言うのを千回も聞いたことがあります。

プロローグ (G版)

天国には喜びがあり、地獄には悲しみがあると
人が言うのを千回も聞いたことがあります。

その通りであると思います。

しかし、それでも、今なおよく存じています、
今生の国に住んでいる人で天国か地獄かどちらかに行
ったことがある人は一人もいないということも。
それについて噂を聞くか、書き物を見つける以外、
他の方法では知ることができないのです。
誰も実際に試して証明することができないからです。
ただ、物事を信じるのはこの目で見たことだけ 10
なんてことは断じてありませんように！

人は、自分自身で見るか、為すかしなければ、
万事偽りだと考えるでしょうが、
たとえ誰もがそれを見られるわけではないとしても、
誓って、それでもやはり事は真実なのですから。
実は、*修道士ベルナルドさえ全ての物を見たわけでは
ありません！

そこで現存する*古の書物に向かわねばなりません、
古の書物によって古い事柄が思い出されるのですから。
そして昔の賢人の教えを、
できるだけ分別よくして信じなければなりません。20
昔の賢人たちは、聖者や、王国や、勝利の栄光や、
愛や、憎悪や、その他のいろいろな事柄の、
昔の定評ある物語について語っています、
一つ一つ列挙することはできませんけれど、
もし古い書物が消失していれば、
記憶の鍵は失われるでしょう。
他に証拠がないところでは、
そのときはこれらの書物を敬い信用すべきです。

そして私には、理解力はわずかしかありませんが、
書物を読むことに喜びを覚え、 30
書物を信じ、信頼し、
書物を心ひそかに
心底から尊んでいるので、私を書物から
遠ざけるような楽しみ事はありません。
それでも*休日にはまれにあります、
例外は、もちろん、五月が来た時です、
鳥たちのさえずりが聞こえ、
花が咲き始めますと、
書物とお勤めに別れを告げるのです！

さて、それから私にはこんな性質もあります、 40
*すなわち、草地のあらゆる花々のうち、
*白と赤の花々を最も愛するという性質があります、
たとえば、私たちの町で雛菊と呼ぶような花です。
五月が来れば、先ほど申しましたように、
その花々にまことに心ひかれるので、
ベッドで夜の明けるのを待たず、
私は飛び起きて草地の中を歩いて行きます、
この花が早朝に目覚めると、
朝日に向かって開くのを見るためです。

その通りだろうと思います。

しかしそれでも、こういう事もよく存じています、
今生の国に住む人で地獄か天国かどちらかに行
ったことがある人は一人もいないということも。
それについて噂を聞くか、書き物を見つける以外、
他の方法では知ることができないのです。
誰も実際に試して証明することができないからです。
ただ、物事を信じるのはこの目で見たことだけ 10
なんてことは断じてありませんように！

昔から見たことがないものだからといって
何もかも偽りだと考えるべきではありません。
たとえ誰もがそれを見られるわけではないとしても、
誓って、それでもやはり一事はそうなのですから。
実は、修道士ベルナルドさえ全ての物を見たわけでは
ありません！

そこで現存する古の書物に向かわねばなりません、
古の書物によって古い事柄が思い出されるのですから。
そして昔の賢人の教えを、
できるだけ分別よくして信じなければなりません。20
そして聖者や、王国や、勝利の栄光や、
愛や、憎悪や、その他のいろいろな事柄の、
昔の定評ある物語について信頼しなければなりません、
一つ一つ列挙することはできませんけれど、
もし古い書物が消失していれば、
記憶の鍵は失われるでしょう。
他に証拠によって立証できないところでは
そのときは古い書物に信頼をおくべきです。

そして私には、才覚はほとんどありませんが、 30
書物を読むことに喜びを覚え、
書物を心ひそかに尊び、
書物に大なる興味と信頼を寄せているので、
私を書物から遠ざけるような
楽しみ事はほとんどありません。
それでも休日か、
さもなければ五月の楽しい時節、
小鳥たちのさえずりが聞こえ、
花が咲き始める頃はそうではありません。
その季節の続く間、勉強に別れを告げるのです！

さて、さらに私にはこんな性質があります、 40
すなわち、草地のあらゆる花々のうち、
白と赤の花々を最も愛するという性質があります、
たとえば、私たちの町で雛菊と呼ぶような花です。
五月が来れば、先ほど申しましたように、
その花々にまことに心ひかれるので、
ベッドで夜の明けるのを待たず、
私は飛び起きて草地の中を歩いて行きます、
この花が明るい朝に目覚めると、
朝日に向かって開くのを見るためです。

この幸せな光景は私の悲しみを全て和らげてくれ、50
 その花に直面すると、とても嬉しく、
 すっかり敬意を表してしまいます。
 花の中の花である彼女は、
 あらゆる徳と誉れにあふれ、
 いつも変わらず色美しく、瑞々しいからです。
 私はその花を愛します、いつも変わらず新たな気持で、
 心臓が動かなくなるまで、ずっと愛します。
 たとえ誓わなくとも、これについて嘘を申しません。
 私ほど生涯通して熱烈に愛した人は誰もいません。
 夕方になると、私は急いで走って行きます、60
 日が西に傾くやいなや、
 この花はどのようにして寝るのか見るためです、
 雛菊は夜を恐れ、ひどく暗闇を嫌っているからです。
 彼(か)の花の面(おも)は、太陽の輝きに、
 開こうとするから、素直に開くのです。
 *ああ、私にはこの花を正しく称えるのに
 十分な英語力、詩や散文の表現能力がありません！
 *されどお助け下さい、知識と能力をお持ちの皆さん、
 鋭敏な感情を詩にする力がおありの恋人の皆さん、
 皆さんは*葉組であろうと花組であろうと、70
 このような場合には尽力して下さい
 私の作文の手助けを少々して下さい。
 なにしろ皆さんが先んじて*実りを刈り取って、
 その穀物を運び去ったことをよく知っているからです、
 私はあちこち落ち穂拾いをしながら、後から来て、
 皆さんが残して行った優れた言葉の落ち穂を
 見つけられれば大変嬉しいことだと思っています。
 そして皆さんが潑刺とした歌の中で歌われたことを、
 たとえ私がたまたま繰り返したとしても、
 忍んでお許し下さり、不愉快に思わないで下さい。80
 皆さんは、私が愛を称え、そしてまた
 才能もしくは能力の限り私が仕える花に
 尽くして歌にすることをご存じですから。
 彼女はこの闇の世界において私を案内し
 導く輝きであり真の光であります。
 私の悲しい胸の内にある心は、あなたを畏怖し、
 いたく愛するので、あなたは真に私の精神の
 *女支配者なのです、だから私は私ではないのです。
 私の言葉、私の行動はあなたに束縛されているので、
 ハープは手並みに従い、90
 奏者の指奏通りに音を出すごとく、
 かようにして私の心の中から笑う声や悲しむ声を、
 好むままに、出すことがおできになります。
 あなたは私の指導者であり*女王でありますように！
 この仕事においても私の一切の悲しみにおいても
 私はあなたを地上の神と呼びます。
 しかし私が昔の物語に信を置き、

こうして日がな一日緑地を歩きまわります。50
 日が西に傾くと、
 その花は花卉を閉じ、就寝するのです、
 夜をひどく恐れるので、
 日の光が射す朝までそうするのです。
 この雛菊は、花の中の花、
 徳とあらゆる誉れにあふれ、
 いつも変わらず色美しく、瑞々しく、
 夏と同じように冬も新しい。
 できれば、私は喜んで誉め称えたいですが、
 悲しいかな、それは私の力に余るのです。80
 なにしろ人びとが先んじて収穫物を刈り取って、
 その穀物を運び去ったことをよく知っているからです、
 私はあちこち落ち穂拾いをしながら、後から来て、
 彼らが残して行った優れた言葉の落ち穂を
 見つけられれば大変嬉しいことだと思っています。
 そして彼らが潑刺とした歌の中で歌ったことを、
 もし私がたまたま繰り返したとしても、
 彼らは不愉快な思いをなさらないよう望んでいます。
 それは葉か花かどちらかに仕える人びとの
 助成と名誉になると言われているからです。70
 どうか信じて下さい、私は花に逆らって葉のために
 詠うようなことをしてみたことはなく、
 葉に逆らって花のために詠おうとしたこともなく、
 麦束に逆らって穀粒のためにもしたことはありません。
 私にはどちらを好むも好まないもないのですから。
 私は今のところどちらにも召し抱えられておらず、
 誰が葉に奉仕し誰が花に尽くしているか知りません。
 それは私が詩作に苦心する目的ではないのです。
 なにしろこの仕事《詩作》は、全く別の酒樽のこと、
 そのような党派争いが始まる前の昔の物語のこと。80
 しかし、私が昔の書物に信を置き、
 それらを敬うようにと申しあげました理由は、
 他に証明によって試すものがないところでは、
 人は典籍を信じなければならぬというためなのです。
 私の意図は、皆さんのもとかからお暇する前に、
 たくさんの物語、あるいは多くの武勇談を、
 作者たちが話すままに、*英語で語ることで、
 どうかそれらの物語を信じて下さい。
 5月がほとんど過ぎ去ろうとした頃の、
 夏のある日、私は緑の野原を歩き回ったことが90
 ありました、それについてすでにお話しましたが、
 瑞々しい雛菊を見るためです、
 やがて太陽が南から西に向かい、
 その花は、恐れる、夜の闇のために、
 花びらを閉じて、休もうとしましたので、
 *私は大急ぎで家に帰り、
 私の所有する小さなあずまやに、

それらを敬うようにと申し上げた理由、そして
 目に見えるもの、もしくは証明できるものよりも
 多くの事柄を信じなければならぬという理由——100
 時を見て、それをお話ししましょう。
 直ちに韻律詩にして話せないのです。
 私の盛んな魂は、まことに若々しく瑞々しい色彩の
 この花をいつも新たに見たくてたまらず、見ることを
 切に望み、私に非常に激しい欲望を強いるので
 熱い意志を未だに心の中に感じて
 夜も明けないうちに私を起こしました——
 *これは5月1日の朝のことでした——
 臆する心と嬉しい献身が一体になって、
 この花の復活に立ち会うために出かけました。 110
 それは薔薇のように真っ赤に昇る太陽に向かって
 花が開く時のことでした、
 その日、太陽は*アゲノールの娘を連れ去った
 *あの獣の胸の位置にありました。
 そして私はすぐに膝をついて、
 努めて、この瑞々しい花を迎え、
 花が開くまで、丈の低い、柔らかな、
 甘い香りの草原の上にずっと跪いていました。
 そこは美しい花々を一面縫取りしたようで、
 至る所とても甘く、とても芳しく香っているので、120
 樹脂あるいは、ハーブ、樹木の芳香と比べて言えば、
 草原の匂いに匹敵するものはどれもありません。
 *それは明らかにあらゆる香りを凌ぎ、
 豊かな美しさではあらゆる花々に優っているからです。
 大地はもう冬の季節の自分のあわれな有様を
 忘れてしまっていました、冬が大地を裸にして挫き、
 その冷たい剣でひどく痛手を負わせたのに、
 今は穏やかな太陽がことごとく和らげ、
 裸にされた大地に、再び新しい衣装を纏わせました。
 冬の間、小鳥たちを脅かし、 130
 雛たちを殺した鳥獵師の、
 罟や網から逃れた小鳥たちは、
 この楽しい季節に、
 鳥獵師のことを、あざけて歌うことや、
 食欲のゆえに、策謀で騙した
 汚いやつを、歌で軽蔑することは
 自分たちのためになるように思われました。
 小鳥たちの歌はこうでした「鳥獵師など無視するぞ、
 やつの狩猟の術もまた」そして連れ合いを
 敬い称え、愛の讃歌を清らかに歌う鳥もいて、 140
 それを聞くのは楽しいことでした。
 そして新しい幸せな夏のために、
 優しく咲く花いっぱい枝の上で、
 小鳥たちは大喜びして連れ合いに向かって、
 歌いました、「聖ヴァレンタインに幸あれ、

刈りたての芝生に新しくベンチを設けていました、
 臥所をつくるように召使いたちに命じ、
 新来の夏を楽しむために、 100
 ベッドの上に花を撒き散らすように言いつけました。
 横になって、目を閉じると、
 1時間か2時間のうちに眠りに落ちてしまいました。
 それから私は草地にいる夢を見ました。
 説明をお聞きになられたのと全く同じように、
 その花を見るために、歩き回っている夢でした。
 この草地は至るところ美しいように、私には思われ、
 一面美しい花々を縫取りしたようでした。
 樹脂あるいは、ハーブ、樹木の芳香に比べて言えば、
 草原の匂いに匹敵するものはどれもありません。 110
 それは明らかにあらゆる香りを凌ぎ、
 豊かな美しさではあらゆる花々に優っていたからです。
 大地はもう冬の季節の自分のあわれな有様を
 忘れてしまっていました、冬が大地を裸にして挫き、
 その冷たい剣でひどく痛手を負わせていましたのに。
 今は穏やかな太陽がことごとく和らげ、
 大地に再び新しい緑の衣装を着せていました。
 冬の間、小鳥たちを脅かし、
 雛たちを殺した鳥獵師の、
 罟や網から逃れた小鳥たちは、 120
 この楽しい季節に、
 鳥獵師のことを、あざけて歌うことや、
 食欲のゆえに策謀で騙した
 汚いやつを、歌で軽蔑することは
 自分たちのためになるように思われました。
 小鳥たちの歌はこうでした「鳥獵師など無視するぞ、
 [やつの狩猟の術もまた]」そして連れ合いを
 敬い称え、愛の[讃歌を清らかに歌う鳥もいて]
 それを聞くのは楽しいことでした。
 そして新しい幸せな夏 [のために] 130
 [彼らは] 歌いました、「聖ヴァレンタインに幸あれ！
 愛しい恋人よ、悔いなんてありません、
 この聖人の日 [に] 君を連れ合いに選んだ [もの]！」
 そうして嘴を合わせあって、
 愛に敬意を表し、慎ましやかな敬礼を [して]
 そのあとまさに愛と自然に [属する]
 他の務めを行ない、
 それで小鳥たちはそれぞれ相手を [遇するのです]。
 私はこの歌を一心不乱に聞きました。
 彼らの言っていることが分かる夢を見たからです。140
 とうとう頭上で雲雀がこう歌いさえりました。
 「見えるよ、力強き〈愛の神〉様が、
 ほら！ あそこにやって来る！ 翼を広げている」
 そのとき草原をはるか見渡すと、
 神がやって来るのが見え、神は緑づくめの

愛しい恋人よ、悔いなんてありません、
この聖人の日に君を連れ合いに選んだもの！」
そうして嘴を合わせあって、
愛に敬意を表し、慎ましやかな敬礼をして、
愛と自然に属する 150
自分たちの他の務めを行ないました。
お好きなように解釈して下さい、気にしませんから。
*自然に反していた小鳥たちは——
新しがり屋の、*小鳥がするように——
自分たちの違反に慈悲を乞い、
悔いていることを謙虚に歌い、
連れ合いたちが彼らを気の毒に思うほどに、
忠実であることを花咲く枝の上で誓ったので、
ようやく連れ合いたちの同意を得ました。 159
小鳥たちは一時〈他人行儀〉が幅を利かしていると
悟ったけれども、〈同情〉の強く優しい力によって、
許してやり、*〈無邪気〉と抑制した〈作法〉によって、
〈慈悲〉が〈正道〉を凌いだのです。
だけど私は愚行あるいは見せかけの憐憫を
無邪気と呼びません、*『倫理学』に書いてある如く、
*中庸が徳の源ですから、そういうことです。
こうして、どんな悪意もない、この小鳥たちは、
恋愛に同意し、憎悪という悪を打ちちゃって、
みんないっせいに唱和しました、
「夏よ、ようこそ、我らの支配者、領主様！」 170
*ゼピュロスとフローラは
花々にそっと優しく、
甘い息を吹きかけ、
花原の男神と女神として、花を広げました。
その原に、私は、5月という楽しい月の間、
眠ることもせず、飲むことも食べることもせずに、
毎日毎日、いつまでも留まれるように思われました。
私は静かにどっかりと腰を下ろし、
肘をついて横臥し、
*「ダイジーエ」、つまり「日の眼」と 180
道理に適う呼び方をする、
女皇であり花の中の花である
雛菊を眺める以外、
他に何もせずに、これは嘘ではありません、
日がな一日留まる覚悟をしました。
私は雛菊が繁栄せんことを神に祈ります、
そして雛菊にかけて、花を愛する皆さんも栄えあれ！
*それでも、私は葉に逆らって
花を称えて詠うなどと、思わないで下さい、
また麦束に逆らって穀粒を称えて詠うことも。 190
私にはどちらを好むも好まないもないのですから。
私は今のところどちらにも召し抱えられておらず、
誰が葉に奉仕し誰が花に仕えているか知らないのです。

王族の衣装を纏ったお妃の御手をとっておられました。
髪の上には金のヘアネットをつけ、
その上にたくさんの花々のついた
白い冠を戴いていました、嘘ではありません。
どこから見ても、まさに雛菊が 150
小さな白い花びらを戴いている如く、
お妃の白い冠の花々もそのようでした。
なにしろ彼女の白い冠は、すべて選りすぐりの、
しかも東洋の上質の同類の真珠からできていたからで、
そのために緑色の服に白い王冠は
見るからに雛菊のようで、
金のヘアネットを加えると余計にそう思われました。
この力強い〈愛の神〉は、緑の小枝をいっぱい
刺繍を施した絹の衣服を着て、
頭上には新しい*百合の花を一面に挿した 160
薔薇の花弁の花冠を載せていました。
だが神のお顔の色を申し上げることはできないのです、
確かにお顔はまことに明るく輝いていましたので
眩しくて目が眩んでしまい、
ほんの一瞬も見ることができなかったからです。
しかしやっとな手には真っ赤に熾る燐のように
赤々と輝く矢を二本お持ちであるのが見えました。
そして翼を天使のように広げ始めました。
愛の神は盲目だと人は言うけれど、
やはり目が見えるように思われました。 170
というのは私を厳しく睨みつけたからです、
神の凝視は私の心を冷やりとさせます。
神は白い冠を戴き、緑づくめの装いを凝らした
高潔なお妃の御手をとられました。
お妃は真に女らしく、上品で、温厚でしたので、
この世で、男たちがいくら求めたく思っても、
〈自然〉がお造りになった人の中では
お妃の半分の美人も見つけれられないでしょう。
*お妃のお名前はアルセステ仁愛妃でした。
常にお妃は栄えあらんことを神にお祈りします。 180
お妃に拝謁できるという慰めがなかったら、
私は、〈愛の神〉の言葉と顔つきを恐れて、
きっと、死んでしまったでしょう、
そのことは時間があれば、この後お話ししますので。
この〈愛の神〉の背後の、この草地には、
19人の女性が王族の服装をして、
緩やかな足取りでやって来るのが見えました。
彼女たちの後には大変な数の女性の一行がやって
来ました。神がアダムをこの地上に造[って]以来、
この3分の1、もしくは4分の1の数の女性さえ
今までこの[広い]世界にいたとは 191
どうしても思えませんでした。
この女性たちはそれぞれ愛に真実を捧げた方々です。

彼らは奉仕や労働を楽しんでいるかもしれませんが、
なにしろ*この事《詩》は、全く別の酒樽のこと、
そのような党派争いが始まる前の昔の物語のこと。

*太陽が南から西に向かい、
この花は、恐れる、夜の闇のために、
花びらを閉じて、休もうとする頃、
私は大急ぎで家に帰りました、 200
眠りにつくためです、そして明朝早く起きて、
すでに述べたように、この花が開くのを見るためです。
そして私の所有する小さなあずまやに、
刈りたての芝生の上にベンチを設えていましたので、
臥所を作るように召使いたちに命じ、
*新来の夏を楽しむために、
ベッドの上に花を撒き散らすように言いつけました。
横になって、目を閉じると、
1時間か2時間のうちに眠りに落ちてしまいました。
それから大変愛し畏敬するこの花を見るために 210
草地に寝転んでいるという夢を見ました。
遠くから草地の中を*〈愛の神〉が歩いて
来るのが見え、*神はお妃の御手を取り、
お妃は緑色の王族の衣装を身につけておられました。
髪の上には金のヘアネットをつけ、
その上に小さな*かわいい花びらのついた
白い冠を戴いていました、嘘ではありません。
どこから見ても、雛菊は
白い小さな花びらを飾っているようですが、
お妃の白い冠の可愛い花々もちょうどそうでした。220
なにしろ白い冠は、すべて、選りすぐった、
東洋の上質の同じ種類の真珠からできていたからで、
そのために緑色の服に白い王冠は
見るからに雛菊のようで、
金のヘアネットを加えると余計にそう思われました。
この力強い〈愛の神〉は、緑の小枝がいっぱい
赤い薔薇の花びらを取り囲む模様の
刺繍を施した絹の衣服を着ており、
開闢以来最も斬新なものでした。
神の金色の髪には金の冠の代わりに太陽の冠を 230
戴いていました、重さによる重圧を避けるためです。
さらに神のお顔は明るく輝きすぎているように思われ、
眩しくて殆どまともに見ることができず、
手には真っ赤に熾（おこ）る燠（おき）のように
赤々と輝く矢を二本お持ちであるのが見え、
翼を天使のように広げることが見えました。
*愛の神は盲目だと人は言うけれど、
やはり目が見えるように思われました。
というのは私を厳しく睨みつけたからです、
神の凝視は私の心がひやりとさせます。 240
神は白い冠を戴き、緑づくめの装いを凝らした

さて、不思議なことであろうとなかろうと、
彼女たちはこの花を見るやいなや、
それを私は雛菊と呼ぶのですが、
全く突然、すぐに立ち止まり、
まるでこの時のためであったかのように、跪きました。
その後、彼女たちは輪になって、
軽やかな足取りでこの花の周りを踊りながら、 200
さながら祝歌のように、このバラッドを歌いました、
それを皆さんに披露しましょう。

バラッド

お隠しなさい アブサロム様 綺麗な金のお髪を
エステル様 お捨てなさい 優しさをことごとく
お隠しなさい ヨナタン様 一切の友情篤い態度を
ペネロペ様とマルキア・カトー様
善女比べをおやめなさい
美しい容姿をお隠しなさい イゾルデ様とヘレナ様
皆さんの顔色なからしめる アルセステ様のご到来

美しいお体を お見せなさるな 210
ラウィニア様 そしてローマの町のルクレティア様
そして愛を高価に買い込んだ ポリュクセネ様
激しい愛情をお持ちの クレオパトラ様も
あなた方の愛する真心と評判をお隠しなさい
そして愛のために大変な苦痛を味わう ティスベ様
皆さんの顔色なからしめる アルセステ様のご到来

ヘーロー様 ディド様 ラオダメシア様 皆一緒に
デモポン様のために縊死なさった ピュリス様も
そして顔つきから見抜かれた カナケー様
イアソンに背かれた ヒュプシピュレ様 220
愛する真心を誇るのも法螺を吹くのもおやめなさい
嘆きなさるな ヒュペルムネストラ様 アリアドネ様
皆さんの顔色なからしめるアルセステ様のご到来

バラッドをすべて歌い終わると、
彼女たちは柔らかな緑の甘い香りの草の上に、
それぞれ順番に、みんな輪になって、
そっと静かに座りました。
最初に〈愛の神〉が座り、それから
緑の衣装に、白い冠をつけたこのお妃が座り、
そして残りの女性たちがみんな次々と、 230
階級に従って、礼儀正しく座ると、
その場では2、3分の間、
沈黙が続きました。

私は、草の斜面にしっかりとたれながら、
この人びとは何を意図しているのか知るために、

この高潔なお妃の御手をとられました。
お妃は真に女らしく、上品で、温厚でしたので、
この世で、男たちがいくら求めたく思っても、
〈自然〉がお造りになった人の中では
お妃の半分の美人も見つけられないでしょう。
それゆえ、私はこの気高いお妃を称えて
*次の歌を誦するのがよいと思います。

バラッド

お隠しなさい *アブサロム様 綺麗な金のお髪を
*エステル様 お捨てなさい 優しさをことごとく
お隠しなさい *ヨナタン様 一切の友情篤い態度を
*ペネロペ様とマルキア・カトー様 252
善女比べをおやめなさい
美しい容姿をお隠しなさい *イズルデ様とヘレナ様
皆さんの顔色なからしめる お妃様がやって来る

美しいお体を お見せなさるな
*ラウニア様 そしてローマの町のルクレティア様
そして愛を高価に買い込んだ *ポリュクセネ様
そして激しい愛情をお持ちの *クレオパトラ様
あなた方の愛の真心と評判をお隠しなさい 260
そして愛のために大変な苦痛を味わう *ティスベ様
皆さんの顔色なからしめる お妃様がやって来る

*ヘーロー様 ディド様 ラオダメイア様 皆一緒に
そして*デモポン様のために縊死なさったピュリス様
顔つきから見抜かれた *カナケー様
*イアソンに背かれた ヒュブシピュレ様
真心を誇るのも法螺を吹くのもどちらもおやめなさい
お二方 *ヒュペルムネストラ様もアリアドネ様も
皆さんの顔色なからしめる お妃様がやって来る

このバラッドは、初めに申し上げましたように、 270
高貴なお妃について歌われるのが相応しいのです。
確かにこの方々は、このお妃に
匹敵する力はまったくありませんから。
太陽は火より明るいように、
この至高のお妃はすべてを凌駕し、
*まことに善良で、美しく、仁愛深いですから、
常にお妃に繁栄がありますことを神にお祈ります！
お妃に拝謁できるという慰めがなかったなら、
私は〈愛の神〉の言葉と顔つきがこわくて、
どんな防衛もできずに、死んでしまったでしょう、280
時間があれば、後ほどそれをお聞かせしますから。

この〈愛の神〉の背後の、草地には、
*19人の女性が王族の服装をして、

石に負けないほど黙って留まっていると、
ついに〈愛の神〉は私の方に目を向けて
言われました、「そこに休んでいるのは誰だ」
神のお尋ねを聞きました時、その問いかけに 239
応えて、「私めでございます」そして神に近づき、
挨拶しました。神は「この花に何をしているのか、
わしの前で、しかも大胆不敵にも。
実のところ、虫のほうこそなたよりも
わしの目の前に来る値打ちがあろう」と言われました。
「恐れながら、これはまた何故でございましょう」
「そなたは、花に何もできないからだ。
*わしのしもべたちはみな賢くて誉れ高いのだ。
そなたはわしの不具戴天の敵でわしに闘いを挑み、
わしの昔なじみのしもべたちをけなし、
そなたの翻訳でもって彼らの邪魔をし、 250
臣下がわしに仕えるために献身することを
妨げ、わしに信頼をよせるのは愚行だと
考えている。そなたはそれを否定することはできぬ、
そなたは平明な文にして、注釈することを不要にして
『薔薇物語』を翻訳したからだ、
それはわしの掟に背く異説の書なのだぞ、
それに賢い子どもをわしから退かせているからだ。
さらにそなたはまことに鈍い頭の中で考えている、
激しい熱い恋の炎に身を焦がす者は、
本当に根からの馬鹿にすぎないのだと。 260
*それでよく分かる、そなたは精神が鈍っている時の
老いぼれ阿呆どもの如く、毫碌し始めていることが。
連中は人を責めるが、自分の悪い所は分からないのだ。
そなたはまた*クリセイデがトロイルスを
捨てたという本を英語で創作しなかったか、
女たちがいかに罪を犯したか示すためにだ。
しかし、それでも、さあこの問いに答えてくれ、
*なぜ女たちの善いところを語らな [かった] のか、
女たちの悪いところを語ったように。
そなたの頭の中にはいい材料がなかったのか、 270
またそなたの所有するすべての書物の中にも善良で
誠実であった女たちの物語が見つからなかったのか。
そう、確か、そなた自身、すぐれた物語がびっしり
詰まっている*60冊の新旧の書物を持っている。
ローマの作家もギリシャの作家も様々な女のことを
取り上げている、彼女らはいかなる生涯を送ったかを、
そして*不貞女1人に対しておよそ善女100人の割合だ。
こういうことは神が知っておられ、そのような題材を
常に探し求めている文人たちもみんな知っているのだ。
*ウァレリエ、ティトゥスあるいはクラウディアヌスは
何と言っているかね。 280
*ヨウィニアヌスに反論したヒエロニムスは何と言っ
ているかね。

緩やかな足取りでやって来るのが見えました。
彼女たちの後には大変な数の女性の一行がやって
来ました。神が*アダムをこの地上に造って以来、
この3分の1、もしくは4分の1の数の人びとさえ
今までこの広い世界にいたとは
どうしても思えませんでした。
この女性たちはそれぞれ愛に真実を捧げた方々です。
さて、不思議なことであろうとなかろうと、 291
彼女たちは私が雛菊と呼ぶ
この花を見るやいなや、
全く突然、すぐに立ち止まり、
まるでこの時のためであったかのように、跪き、
一声に歌いました、「女の道の真実（まこと）に
誉れあれ、私たちみんなの賞美を
象徴するこの花にも栄えあれ！
その花の白い冠がその証となります」
こういう歌詞を歌って、それぞれ輪になって、 300
彼女たちはそっと静かに座りました。
最初に〈愛の神〉が座り、次には
緑の衣装に、白い冠をつけたかのお妃が座り、
そして残りの女性たちがみんな、次々と、
身分に従って、礼儀正しく坐ると、
その場では2、3分の間、
沈黙が続きました。
私は好意をいだいて、この花のそばに跪きながら、
この人びとは何を意図しているのか知るために、
石に負けないほど黙って留まっていると、 310
ついにこの〈愛の神〉は私の方に目を向けて、
言われました、「そこに跪いているのは誰だ」
神のお尋ねを聞ききました時、その問いかけに
応えて、「私めでございます」そして神に近づき、
挨拶しました。神は「この花に何をしているのか、
そんな近くで、わしの花に、大胆不敵にも。
実のところ、虫のほうがそなたよりも
わしの花に近づく値打ちがあるろう」と言われました。
「恐れながら、これはまた何故でございましょう」
「そなたは、花に何もできないからだ。 320
この花は貴重でとても喜ばしいわしの宝物であるし、
そなたはわしの敵だ、しかもわしの臣下に闘いを挑み、
わしの昔なじみのしもべたちをけなし、
そなたの翻訳でもって彼らの邪魔をし、
わしに仕えるべき臣下の献身を
妨げ、〈愛の神〉に仕えるのは愚行だとそなたは
考えている。そなたはそれを否定することはできぬ、
そなたは平明な文にして、注釈することを不要にして
*『薔薇物語』を翻訳したからである、
それはわしの掟に背く異説の書なのだぞ、 330
それに賢い者どもをわしから退かせているからだ。

生涯乙女たちはいかに純潔で、妻たちはいかに貞淑で、
未亡人たちはいかに節操が堅かったかを、
ヒエロニムスは語っている、しかも数人でなく、
恐らく、百人も立て続けに語っているだろう。
だから真実のために彼女たちが耐え忍んだ悲しみを
読むのは哀れで、気の毒なことだ。
なにしろ彼女たちは愛に真実を尽くしたので、
新しい人と連れ添うより、 290
むしろ様々な方法で命を断つことを選び、
物語に語られているように、死んでいったから。
中には焼死する者もいたし、首をかき切る者もいた、
不義を犯したくないがゆえに溺死する者もいた。
彼女たちはみんな処女性を守ったからだ、もしくは
結婚生活を、もしくははやもめ暮らしを守ったからだ。
これを守ったのは信仰のためではなく、
すべてまことの徳と清らかな貞節のためで、
男たちに非難されないためなのだ。
だが彼女たちは、全員揃ってあらゆる恥辱に
曝されることをひどく恐れた異教徒たちであった。300
これらの昔の女たちは自分の名を固くかたく守った、
それなのに男ときたらその当時の最低の女ほどの
まごころと優しい心根を持ちうる人は
この世では見つからないだろうとわしは信じている。
さらに*オウィディウスの書簡体作品は真の妻たちや
彼女たちの苦しみについてどう述べているかね。
*ヴァンサンは著作の『歴史の鏡』の中ではどうかね。
またそのような題材を扱う、世界中の作家たちから、
キリスト教徒であれ異教徒であれ、話は聞けるだろう。
一日中こうしてただ話をする必要はない。 310
だがな、言うておくが、そなたはどこか悪いのかね、
*物語の初稿を書いて、その実を書き忘れるとは。
私を産んでくれた聖ウエヌスに誓って、
昔他の年寄りの馬鹿者どもがしたように、
たとえそなたがわしの信条を否認したとしても、
人に察せられるほど、そなたはそれを悔いなさい！」
そのとき最も高貴なお妃アルセステは語りかけられ、
仰いました、「神よ、あなたがこの者を責めた
これらの点について、この者が返答できるかどうか、
礼儀として、聞かねばなりません。 320
神たるものはそのようにして怒るべきではなく、
神性をしっかりと持って、
公正であり、また情け深くもあるべきです。
相手側の言い分を聞かないうちに
神は怒りをぶちまけるのは公正ではありません。
並べられる不平の数々は全て絶対真実とは限りません。
〈愛の神〉には嘘で固められた多くの話が入ります。
あなたの宮居には沢山のおべっか使いがいますし、
多数の好奇心の強いおしゃべりの告発人がいますから。

そしてそなたはクリセイデを好きなように語ったから、
どんな鋼鉄にも劣らぬ位この上なく節操の堅かった
女たちに、男たちは以前より信頼を無くしている。
答える前によく考えなさい。

昔他の見下げ果てた者どもがしたように、
たとえそなたがわしの信条を否認したとしても、
わしの母上である*聖ウェヌスに誓って、
そなたが生を営むなら、これを厳しく悔いなさい、
それは人に十分に察せられよう！」 340

そのとき緑色ずくめの装いのお妃は語りかけられて、
仰いました、「神よ、あなたがこの者を責めた
これ一切について、この者が返答できるかどうか、
礼儀として、聞かねばなりません。
神たるものはそのようにして怒るべきではなく、
神性をしっかりと持って、
仁慈深くそして情け深くあるべきです。

もしあなたはあまねく知られる神でないなら、
これから申し上げますが、こうなるでしょう、
この男はあなたに不当に訴えられるとします、 350
それに対して当然この男は弁明することになります。
*あなたの宮居には沢山のおべっか使いがいますし、
多数の好奇心の強いおしゃべりの告発人がいますから、
彼らはあなたと交わりを得るためや嫉妬のために、
全く自分たちの想像のみにしたがって、
多くの雑音をあなたのお耳にたたき込むのです。
以上がその理由です。嘘を申しません。

*嫉妬は常に宮廷の洗濯女、
彼女は、夜も昼も、カエサル館から 359
離れないからと、かようにダンテは言っています。
誰が出て行こうと、とにかく嫉妬は退出を望みません。
そしてまた、たぶん、この男はばかですから、
(文芸) 作品を書く習慣があるために
悪意と思わずに、詩を作るのかもしれませんが、
どんな内容にするか彼自身頓着しないのです。

またある人からあの二つの作品を作るように
命じられたので、あえて拒絶しなかったのです、
いやこの男はこれについて全く悔いております。
彼は昔の作家たちが書いたものを翻訳する際に、
まるで悪意をもって書き、愛を蔑んで 370
彼自らそれを作ったかのように見えようとも、
そんなひどい事をしたことはないのです。
廉潔な支配者はこれを念頭に入れておくべきで、
暴虐以外どんな関心も持たない
*ロンバルディアの暴君たちのようにすべきではあり
ません。

生来、王あるいは支配者たる者は、
非道の限りを尽くす、税の取り立て人のように、
暴虐でも残酷でもあってはならないからです。

彼らは憎悪のためとか、妬み深い想像のために、330
また、あなたと何かぐずぐず話を交わすために、
多くの事をあなたのお耳にたたき込むのです。
嫉妬は——嫉妬に天罰が下らんことを！——
いつも大きな宮廷での洗濯女、
彼女は、夜も昼も、カエサル館から
離れないからと、かようにダンテは言っています。
誰が出て行こうと、いつも嫉妬は退出を望み[ません]。
この男はあなたに不当に訴えられるとします、
それに対して当然この男は弁明することになります。
そうでないと、ねえ、この男はばかですから、 340
本を書く習慣があるために、
悪気なく一つの作品を翻訳するかもしれませんが、
どんな内容にするか気にしないのです。
だからこの男は『薔薇物語』を書き、無邪気にも『ク
リセイデ物語』も書きましたが、
自分の伝えていることが分からなかったのです。
またある人からあの二つの作品を作るように
命じられたので、あえて拒絶しなかったのです、
これより前に多くの本を書いたことがありますから。
彼は昔の作家たちが書いたものを翻訳する際に、
まるで悪意をもって書き、愛を蔑んで、 350
彼自ら作ったかのように見えようとも、
そんなひどい事をしたことはありません。
廉潔な支配者はこれを念頭に入れておくべきで、
傲慢と暴虐を常とする
ロンバルディアの暴君たちのようにすべきではありま
せん。

生来、王あるいは支配者たる者は、
非道の限りを尽くす、税の取り立て人のように、
暴虐で残酷であってはならないからです。
王は思わねばなりません、彼は自分の家臣であると
そして真の義務として、自分は 360
臣民に率直な仁慈を示すのが当然であり、
彼らが申し出れば、時を移さず
彼らの弁明や、不平や、訴えを
よく聞いてやるのが望ましいと。
次の言葉はかの哲学者の意見です、
王たる者は家臣を公平に治めるべきである。
無論、それが王の務めなのです。
それに対して王たる者はこれより以前の
幾百星霜の昔からかたく誓っているのです。
自分の諸侯たちのために地位を守ってやるために、370
彼らを褒めそやし栄誉を与え、最も大事にすることが
当然のことで、道理に叶っているのです——
諸侯たちはこの世では神格化された英雄ですから——
王は貧しい人[も]金持ちも両方に、
彼らの地位は同等でなくとも、これをし、

王は思わねばなりません、彼は自分の家臣であり、
 彼は櫃の中の自分の宝物であり黄金であると。 380
 次の言葉は*かの哲学者の意見です、
 王たる者は家臣を公平に治めるべきである。
 無論、それが王の務めなのです。
 王は諸侯たちのために地位を守ってやるとはいえ、
 彼らを褒めそやし栄誉を与え、最も大事にすることが
 当然のことで、道理に叶っているのです——
 諸侯たちはこの世では神格化された英雄ですから——
 *だけど王は貧しい人も金持ちも、両方に、
 彼らの地位は同等でなくとも、公平にし、
 貧しい人びとには同情心を持つべきです。 390
 ほら、ライオンのやさしい性質をごらん下さい。
 一匹の虻が不快感を与えるか刺す時には、
 ライオンはしっぽでその虻をそっと軽くたたいて
 追い払います。ライオンは貴種であるために
 野良犬、さもなければ他の獣がするように、
 虻に仕返ししようとしませんからです。
 高潔な精神には抑制がなければなりません、
 すべての物を公平に秤にかけねばなりません、
 常に自分の地位に配慮して精を出さねばなりません。
 神よ、答弁させずに人に死刑を宣告することは 400
 君主たるべきものにはたやすいことですが、
 君主たるものがそれを使うのは邪道です。
 たまたま弁明することができなくて、
 恐れ多い気持ちで慈悲を乞い、
 擦り切れたシャツのまま、身を投げ出し、
 あなたご自身のお裁きを乞うことを申し出ますれば、
 神というものはしばらく考えられてから、
 自分の名誉とその男の罪を秤にかけねばなりません。
 何しろ、この場合死罪のどんな根拠もありませんから、
 なおさら訳なく情け深くなれるはずでしょう。 410
 怒りをお静め下さい、そして少し柔軟におなり下さい。
 この男は持ち前の能力を発揮してお役に立っています。
 詩作によってあなたの掟をよく奨励しました。
 この男はたとえ上手に書くことができなくとも、
 あなたの名を称えて、無学な人びとが、
 あなたにお仕えすることを喜ぶようにしたのです。
 この男は*『名声の館』と呼ばれる本を書き、
 *『公爵夫人ブランチの死』も書きました、
 恐らく、*『鳥の議会』も、
 それから*『テーベのパラモンとアルシーテ』の愛も、
 もっともこの物語はあまり知られておりませんが。421
 そして*バラッド、ラウンドル、ヴィルレーと呼ばれる、
 多くの讃歌をあなたの祝祭日のために作りました。
 さらに、他の宗教作品についてお話ししますと、
 散文で*『ボエース』を訳しましたし、
 *『聖セシリア』の生涯も書きました。

貧しい人びとには同情心を持つべきです。
 ほら、ライオンのやさしい性質をごらん下さい。
 一匹の虻が不快感を与えるか刺す時には、
 ライオンはしっぽでその虻をそっと軽くたたいて
 追い払います。ライオンは貴種であるために、 380
 野良犬、さもなければ他の獣がするように、
 虻に仕返ししようとしませんからです。
 高潔な精神には抑制がなければなりません、
 すべての物を公平に秤にかけねばなりません、
 常に自分の地位に配慮して精を出さねばなりません。
 神よ、答弁や発言させずに人に死刑を宣告することは
 君主たるべきものにはたやすいことですが、
 君主たるものが、それを使うのは邪道です。
 たまたま弁明することができなく [て]、
 悲しい気持ちで慈悲を乞い、 390
 擦り切れたシャツのまま、身を投げ出し、
 あなたご自身のお裁きを乞うことを申し出ますれば、
 神というものは、しばらく考えられてから、
 自分の名誉とその男の罪を秤にかけねばなりません。
 何しろこの場合死罪のどんな根拠もありませんから、
 なおさら訳なく情け深くなれるはずでしょう。
 怒りをお静め下さい、そして少し柔軟におなり下さい。
 この男は持ち前の能力を発揮してお役に立っています。
 詩作によってあなたの掟を [よく] 奨励しました。
 この男は若い頃、あなたの高位を支持しました。 400
 今は変節漢になっているかどうか分かりませんが、
 だけど私はよく分かります、この男は書く物を用いて、
 あなたの名を称えて、無学な人びとが
 あなたにお仕えすることを喜ぶようにしたのです。
 この男は『名声の館』と呼ばれる本を書き、
 『公爵夫人ブランチの死』も書きました、
 恐らく、『鳥の議会』も、
 それから『テーベのパラモンとアルシーテ』の愛も、
 もっともこの物語はあまり知られておりませんが。
 そしてバラッド、ラウンドル、ヴィルレーと呼ばれる、
 多くの讃歌をあなたの祝祭日のために作りました。
 さらに、他の労作についてお話ししますと、
 散文で『ボエース』を訳しましたし、
 *教皇インノケンティウス三世の作品に見られる
 *『人類の惨めな状態』についても訳しましたし、
 『聖セシリア』の生涯も書きました。
 この男はまた、ずっと昔に、
 オリゲネス作『マリア・マグダレナ』を訳しました。
 今はこの男にはもっと軽い処罰を科すべきです、
 たくさん詩と作品を作りましたから。 420
 さてあなたは神であり王でもありますゆえ、
 私、かつてトラキアの王妃であったアルセステは
 あなたの恩寵にすがってこの男のためにお願ひします、

この男はまた、ずっと昔に、
*オリゲネス作『マリア・マグダレナ』も訳しました。
今はこの男にはもっと軽い処罰を科すべきです、
たくさん詩と作品を作りましたから。 430

さてあなたは神であり王でもありますゆえ、
私、*かつてトラキアの王妃であったアルセステは
あなたの恩寵にすがってこの男のためにお願いします、
この男を全生涯決して傷めつけないということを。
そうすればこの男はあなたに誓い、しかもすぐに、
もうこれ以上このように過ちを犯さず、
あなたの仰せの通りに、全生涯を愛に忠実に
身を捧げた女たちについて、乙女であれ、
人妻であれ、どちらであれ、詩にしてください。
そして『薔薇物語』か『クリセイデ物語』かにおいて
悪く言った分、埋め合わせに手助け致します」 441

〈愛の神〉はすぐにお妃にこう答えられました。
「お妃、あなたは大変慈悲深くて誠実なお方と知り、
世界が新しく造られてよりこのかた、
あなたを凌ぐ立派なお方はもう
決して見つからないと知ってから、ずっと久しい。
もしわしが今の地位を維持しておれば、
あなたの頼みを断れない、また断るつもりはない。
すべてあなたの心次第、望むことをしてやってくれ。
わしは、ただちに、すべて許す。 450

*贈り物を授ける者あるいは恵みを施す者は誰であれ、
早速行ないなさい、感謝はそれだけ大きくなろう。
それ故この男に何をさせるかあなたが判断して下さい。
さあ、ここにいるお妃に感謝を申し上げなさい」

私は起き上がり、跪いて、
こう申し上げました、「お妃様、上天の神様が
お報いあらんことを、おかげで私に対して
〈愛の神〉様はお怒りを慎まれてお許し下さいました、
そして私を助けて、この状態に置いて下さった
あなたは何者でおありか、本当に分かるまで、 460
末永く私に生きる恵みをお与え下さい。
でもこの際、私は間違ったことをしておりませんし、
愛に背いたこともしていないと本当に思っております。
なぜなら*正直な人間は、疑いの余地なく、
泥棒と行動を共にしないからです。
私は偽の恋人をいささか責めましたが、
真の恋人から責められるいわれはありません。
真の恋人たちはむしろ私に味方すべきなのです。
私は『クリセイデ物語』や『薔薇物語』について
書くか語るか、しました、原作者がどう言おうと、470
とにかく、誓って、愛の真実(まこと)を促し、
愛を大事に育てることが、私の意図であり、
諸例を示して、愛の背信と悪徳を
警告することが、私の本意でした」

この男を全生涯決して傷めつけないということ。
そうすればこの男はあなたに誓い、しかもすぐに、
もうこれ以上このように過ちを犯さず、
あなたの仰せの通りに、全生涯を愛に忠実に
身を捧げた女たちについて、乙女であれ、
人妻であれ、どちらであれ、詩にしてください。
そして『薔薇物語』か『クリセイデ物語』かにおいて
悪く言った分、埋め合わせに手助け致します」 431

〈愛の神〉はすぐにお妃にこう答えられました。
「お妃、あなたは大変慈悲深くて誠実なお方と知り、
世界が新しく造られてよりこのかた、
あなたを凌ぐ立派なお方はもう
決して見つからないと知ってから、ずっと久しい。
そのために、もしわしが今の地位を維持するならば、
あなたの頼みを断れない、また断るつもりはない。
すべてあなたの心次第、望むことをしてやってくれ、
そして、ただちに、すべて許す。 440

贈り物を授ける者あるいは恵みを施す者は誰であれ、
早速行ないなさい、感謝はそれだけ大きくなろう。
それ故この男に何をさせるかあなたが判断して下さい。
さあ、ここにいるお妃に感謝を申し上げなさい」

私は起き上がり、跪いて、
こう申し上げました、「お妃、上天の神様が
お報いあらんことを、おかげで私に対して
〈愛の神〉様はお怒りを慎まれてお許し下さいました、
そして私を助けて、このような状態に置いて下さった
あなたは何者でおありか、本当に分かるまで 450
末永く私に生きる恵みをお与え下さい。

でもこの際、私は間違ったことをしておりませんし、
愛に背いたこともしていないと本当に思っています。
なぜなら正直な人間は、疑いの余地なく、
泥棒と行動を共にしないからです。
私は偽の恋人をいささか責めましたが、
真の恋人から責められるいわれはありません。
真の恋人たちはむしろ私に味方すべきなのです。
私は『クリセイデ物語』や『薔薇物語』について
書くか語るか、しました、原作者がどう言おうと、460
とにかく、誓って、愛の真実(まこと)を促し、
愛を大事に育てることが、私の意図であり、
諸例を示して、愛の背信と悪徳を
警告することが、私の本意でした」

するとお妃は答えられました、「独りよがりの
主張をやめなさい。

〈愛の神〉様は正邪いづれの反論もお望みではない、
だからわたしから次のことを学びとりなさい！
そなたは恩寵を得ておりますのでその理を守りなさい。
これからそなたは自分の罪にどんな償いをすべきか
申しましょう、そしてここでよく理解しておきなさい。

するとお妃は答えられました、「独りよがりの主張を止めなさい。

〈愛の神〉様は正邪いづれの反論もお望みではない、だからわたしから次のことを学びとりなさい！
そなたは恩寵を得ておりますのでその理を守りなさい。これからそなたは自分の罪にどんな償いをすべきか申しませう。ここでよく理解しておきなさい。 480
そなたは、生きています限り、毎年毎年、そなたの時間の大部分を費やして生涯にわたって愛に真実を捧げた善女たちの、つまり乙女たちや人妻たちの栄誉伝を詩作することに費やしなさい。 485
彼女たちを裏切った虚言男どもについても語りなさい、一生の間何人の女に恥辱を与えることができるか試す以外に、何もしなかった虚言男どもについてです。世間では今やそれは娯楽話と思われているのですから。たとえそなたは恋人の立場になれそうにないとしても、愛を称揚しなさい。この贖いをそなたに課しましょう。そして〈愛の神〉様にこうお願い申し上げます、しもべたちに是非とも命じて、そなたを促し、そなたの骨折りに報いてやるようにと。さあ自分の道を進みなさい、そなたの贖いはほんの軽いものです。 495

この本が出来上がったなら、わたしの代わりに
*エルタム館かシーン館かにて王妃様に献上なさい
〈愛の神〉は微笑み、それから仰いました、「もっとひどく苦しむべきだったそなたに、
*贖いをほとんど課されなかったこのお方は 500
人妻かそれとも乙女か、お妃かそれとも公爵夫人か、それともどんな身分のお方か、存じておるかね。
*ところで同情心は優しい心に速やかに流れるもの、分かるはず、何者であるか明らかにしておられるよ」
*私は答えました「いいえ、神様、恐縮でございますが、優しいお方と存じている以外、それ以上何も」
〈愛の神〉は仰いました「わしの頭巾にかけて、なるほど尤もなことだ！ よく考えてみれば、きつと、よく分かることなのだが。
*大箱の中にある、本の中には、 510
*雛菊に変えられたアルセステ王妃の優れた善性の話が書かれていないかね。
彼女は夫に代わって死ぬことを望み、それだけでなく夫よりむしろ、自分が黄泉の国へ行くことを望まれた、そして、確か、彼女はヘラクレスに救われて、再び黄泉の国から連れ戻され、幸せになったことがね」
私は再び応えて、申し上げました「はい、それなら存じております。こちらは優しいアルセステ様、あの雛菊殿であり、私の心の安らぎの君ですか。私はこの御婦人の優しさが深く偲ばれます、 520

そなたは生きています限り、毎年毎年、 471
そなたの時間の大部分を費やして生涯にわたって愛に真実を捧げた善女たちの、つまり乙女たちや人妻たちの栄誉伝を詩作することに費やしなさい。
彼女たちを裏切った虚言男どもについても語りなさい、一生の間何人の女に恥辱を与えることができるか試す以外に、何もしなかった虚言男どもについてです。世間では今やそれは娯楽話と思われているのですから。たとえそなたは恋人の立場になれそうにないとしても、愛を称揚しなさい。この贖いをそなたに課しましょう。そして〈愛の神〉様にこうお願い申し上げます、しもべたちに是非とも命じて、そなたを促し、そなたの骨折りに報いてやるようにと。さあ自分の道を進みなさい、そなたの贖いはほんの軽いものです。 485

〈愛の神〉は微笑み、それから仰いました、「もっとひどく苦しむべきだったそなたに、ほとんど贖いを課されなかったこのお方は、人妻かそれとも乙女か、お妃かそれとも公爵夫人か、それともどんな身分のお方か、存じておるかね。 490
ところで同情心は優しい心に速やかに流れるもの、分かるはず、何者であるか明らかにしておられるよ」
私は答えました「いいえ、神様、恐縮でございますが、優しいお方と存じている以外、それ以上何も」
〈愛の神〉は仰いました「わしの頭巾にかけて、なるほど尤もなことだ！ よく考えてみれば、きつと、よく分かることなのだが。
大箱の中にある、本の中には、雛菊に変えられたアルセステ王妃の優れた善性の話が書かれていないかね。 500
彼女は夫に代わって死ぬことを望み、それだけでなく夫よりむしろ自分が黄泉の国へ行くことも望まれた、そして、確か、彼女はヘラクレスに救われて、再び黄泉の国から連れ戻され、幸せになったことがね」
私は再び応えて、申し上げました「はい、それなら存じております。こちらは優しいアルセステ様、あの雛菊殿であり、私の心の安らぎの君ですか。私はこの御婦人の優しさが深く偲ばれます。 509
そのために彼女の生存中も死後も彼女の優れた恵み深さは彼女の評判をいや増します。彼女《お妃》はご自分の化身のお花、雛菊に私が抱く愛慕の情に対して私によく報いてくれました。アガトンが言うように、お妃の善性のゆえに、ユピテルがお妃を星に変えられても不思議ではありません！

お妃の白い冠はその証を表しているのです。
お妃は冠の小さな花々と同じくらい

そのために彼女の存命中も死後も
彼女の優れた恵み深さは彼女の評判をいや増します。
彼女《お妃》はご自分の化身のお花、雛菊に私が抱く
愛慕の情に対して私によく報いてくれました。
*アガトンが言うように、お妃の善性のゆえに、
*ユピテルがお妃を星に変えられても不思議ではありません！

お妃の白い冠はその証を表しているのです。
お妃は冠の小さな花びらと同じくらい
数多くの高徳もお持ちでしたから。
*女神キュベレは、お妃を思い出され 530
お称えになって、雛菊を、つまり、ご覧のように、
すべて真っ白な冠を戴く花をお作りになりました。
*マルスは彼女の冠にルビー色の代わりに、確かに、
赤色を加えられ、冠の白の中に配されました」
お妃は目の前でこのように褒め称えられると、
恥ずかしさのために少し赤くなられました。
すると〈愛の神〉は仰いました「そなたが
『お隠しなさい アブサロム様 あなたのお髪を』と
バラッド形式で詠ったそのとき、*その歌の中に
お妃の名を入れ忘れたのは、大きな不注意だった。540
そなたはお妃に大いに恩義があり、
それに恋人になろうとするどんな女性にとっても、
お妃はお手本であることをよく知っているのだから。
お妃は典雅な恋愛の術について教授されたもの、
とりわけ婦道の生き方について、
さらに人妻が守るべきあらゆる限界についても。
そなたの小才はそのとき眠っていたのだ。
しかしこれからそなたの命を担保にして命令する、
*そなたの伝記にこの人妻について書くのは、前もって
他のさほどでもない女たちのことを書いてからだ。550
ではこれでさらばだ、もうこれ以上命じない。
しかしわしが去る前に、とくとう言っておこう、
誠実な恋人ならだれも地獄に入らないだろう。
*ここに一列に並んで座っているこの夫人たちは、
見分けがつけば、そなたのバラッドの中に出ているし、
そなたが書いた書物の中でみんな見かるだろう。
さあ彼女たちをそなたの聖女伝で記憶に留めなさい。
*つまりそなたの知っている女たちのことだ。
ここにはそなたが知っている以上の人数の2万人もの
女性が座っているのだから、すべて善女たちで、560
何が起ころうとも、愛に真実を尽くした女たちだ。
そなたの好むままに彼女たちの韻律詩を作りなさい—
(日が西に沈もうとしている) わしはそろそろ
この連れをみんな連れて、楽園へ帰らねばならぬ—
そして新鮮な雛菊にいつまでも仕えなさい。 565
そなたはクレオパトラから始めて、話を進めてほしい、

そうすれば、そなたを可愛がってやれる。
数多くの高徳もお持ちでしたから。
女神キュベレは、お妃を思い出され
お称えになって、雛菊を、つまり、ご覧のように、
すべて真っ白な冠を戴く花をお作りになりました。520
マルスは彼女の冠にルビー色の代わりに、確かに、
赤色を加えられ、冠の白の中に配されました」
お妃は目の前でこのように褒め称えられると、
恥ずかしさのために少し赤くなられました。
すると〈愛の神〉は仰いました「そなたが
女たちの心の弱さを書いたのは大きな不注意だった、
そなたは女たちの善性を、証拠によって、
そしてまた昔の物語によって、知っているのだから。
勅殻を捨てて、実について上手に書きなさい。
なぜアルセステについて書かないのかね、 530
そしてなぜクリセイデを眠らせ休ませないのかね。
書くべきはアルセステのことだからだ、
そなたは彼女が貞淑のモデルであることを
知っているのだから。彼女は典雅な恋愛について
教授されたもの、とりわけ婦道の生き方について、
さらに妻が守るべきあらゆる限界についても。
そなたの少才はそのとき眠っていたのだ。
しかしこれからそなたの命を担保にして命令する、
そなたの伝記にこの人妻について書くのは、前もって
他のさほどでもない女たちのことを書いてからだ。540
ではこれでさらばだ、もうこれ以上命じない。
そなたはクレオパトラから始めて、話を進めてほしい、
そうすれば、そなたを可愛がってやれる」
そう言われて、私は眠りから覚め、
こうしてすぐにこの伝記を書き始めました。 545

プロローグ ココニ終ワル

あの恋人はどんな男であるかこれから見られよう、
彼女と同様に愛ゆえにひどく苦しんでいるだろうから。
そなたはそんな恋人たちが盛んな時に為したことを
全て詩にできないことは、わしはよく分かっている。
*それを讀んだり聞いたりするには長すぎるだろう。
そなたは次の方法で作れば十分だ。
古の作家たちが満足して扱っている方法に従って、
善女たちの生涯の精髓を述べるという方法だ。 575
こんなに多くの物語を話そうとする者は誰であれ、
話が長くならないうちに、手短に済ますべきなのだ」
そう言われて私は自分の書物を取り出し、
こうしてすぐにこの伝記を書き始めました。

プロローグ ココニ終ワル

- ここに訳するにあたって、Larry D. Benson (gen. ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd Edition (Boston: Houghton Mifflin, 1987) を底本にした。ほかに A. C. Baugh (ed.), *Chaucer's Major Poetry* (New Jersey: Prentice-Hall, 1963.) J. H. Fisher (ed.), *The Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1977.) を随時参照した。
- 固有名詞のカタカナ表記は英語表記をとらず、基本的に原語表記をとった (ただし *Alceste* はアルセステのままにした)。それでも一般に通用していないと思われる場合は通用名を採用した。なお、ギリシャ語とラテン語のカタカナ表記は母音の長短をできるだけ区別しないようにした (例、ソクラテースでなくソクラテス、アエネーアースでなくアエネアス)。
- 抽象的観念の擬人化されたものは括弧 () で記した。

『善女列伝』注

(プロローグにおいてF版とG版と施注個所が重複する場合は、F版の個所を優先して注を施し、G版をつけ加えた。)

- * **F/G16** 修道士ベルナルド Bernard 知者として有名なクレボアの聖ベルナルドス St. Bernard of Clairvaux (1090- 1153 年) のことであろう。「ベルナルドスさえすべての物を見なわけではない」という諺的表現は一般に普及していたようだ。いくつかの写本の欄外にラテン語にした諺 *Bernardus monachus non uidit omnia* が書かれている。この行はこの英訳である。
- * **F/G17** 古の書物に向かわねば… 現代では科学者はいつも解決を未来に求める。創案し、計画した実験の中から法則を求めようとする。中世では、たとえば中世の錬金術師に例をとれば、彼らは卑金属を貴金属に変えるにあたって、その法則を、過去の中から、殊に過去のテキストから見出そうとした。過去の聖賢の中に真理の証明や真の法則があると考え、それを求めた。彼らにとって過去は完全なものだった。中世の人びとは、世界は英知と善の状態から愚劣と不信仰の状態に退歩していくものと信じた。そこで古ければ古いほど尊敬し、書物については新しいものよりも古い書物を尊重したのである。
- * **F35, G35** 休日 *holyday* / (G版では *halyday*) を「休日」と訳したが、中英語 *holyday* の意味は、おそらく現代英語の *holiday* あるいは *holy day*、つまり *the holy day*、すなわち日曜日であろう。
- * **F/G41-43** この3行は、マシヨール Machaut の『雛菊の物語詩』 *Dit de la Marguerite* や、デシャン Deschamps 『自由の小詩』 *Lai de Franchise* や、フロアサール Froissart 『愛の楽園』 *Paradis d'Amours* (チョーサーが『公爵夫人の書』 *The Book of the Duchess* を書いた時にはすでにこの詩をよく知っていた) のような、同時代のいくつかのフランス詩が示す雛菊 *daisy* (= *Fr. Marguerite*) 崇拝を反映している。
- * **F/G42-43** 白と赤の花々…雛菊 *daysye(s) / dayesye(s)* つまり *daies eie* (= *day's eye*, i.e. *the sun*) 雛菊 *daisy* は朝に花が開いて、夕方に閉じる。そして花の形が太陽に似ているので、*ダイジーエ* という名があると思われる。黄色な花盤の周りに、放射状の星形の白い (時にはピンクがかった) 花びらをつける。花びらの数は 30 枚から 50 枚以上もある。香りはない。イギリス種の雛菊を見ると花びらの先端の色はピンク色をしている。
- * **F66-67** これは修辭的表現であって、「謙遜」のトポスの変形とみられるかもしれない。これに似た言い回しはいくつかの個所でみられる。たとえば「騎士の話」1459-60「だれが彼の苦悩を英語でうまく詠いあげられようか」(笹本訳)、他に「弁護士の話」778-79、「近習の話」37-38、「公爵夫人の書」898-99。一方で当時の文学的な英語表現の貧しい状態について関心を示しているのかもしれない。『ウェヌスの哀訴』 *The Complaynt of Venus* 79-82「そしてまたフランスで詩を作る人々の華たる、／グランソンの靈妙な詩作品を一語一語なおすのは、／英語の韻にはこんな欠陥があるので、／私には難行苦行の作業なのですから」(笹本訳) 参照。
- * **F68-77** これは、マシヨール、フロアサール、デシャンのような同時代の詩人たちに向かって、彼らの雛菊 *marguerite* の詩の一部を借用したことに対して、チョーサーの謝意を表しているかとみなせるかもしれない、とロビンソン (F.N. Robinson) はいう。
- * **F70** 葉組…花組 イングランドとフランスの廷臣たちは、五月祭を祝う行事の際、戯れに花と葉の二組にそれぞれ分かれてそれぞれの組を弁護し合った。花組と葉組は同時代の宮廷風恋愛にふける人たちの楽しみごとの中にあらわれる寓意的意義の対抗党派である。自ら花組だと宣言する人々は愛に短時間で美しく花開く人々であり、一方葉組を支持する人々は当然ぐらつかない節度のある意義を表す人々である。かつてチョーサーによるものと思われた *The Flower and the Leaf* と呼ばれる 15 世紀初期の寓意詩において、*Flower* の信奉者は歓喜にふけるが、一方 *Leaf* の信奉者は勇敢で慎み深いのである。
- * **F73** 実り *makynge* をこう訳した。ここでは (the fruit) of writing 「詩作の (成果)」の意。「収穫物」にたとえている。普遍的なテーマと古典的な主題についてラテン語で書いた *poesye* に対比して、*makynge* は、特に自国語で書いて、同時代の社会的な関心と好みを狙った *making poetry* (詩を作ること) である。
- * **F88** 女支配者 *maistresse* (*ModE. mistress*) 「女支配者」と訳した。
- * **F94** 女王 *lady sovereigne* (*ModE. sovereign*) 「女王」と訳した。
- * **G87-8** 英語で語る イングランドは 1066 年ノルマンディ公ウィリアムによって征服されて以後、フランス語が公用語になった。1362 年議会在英語で開会を宣言するまでの約 300 年間、英語はイングランドの公式の場で使われなかったのである。1362 年といえば英仏百年戦争の最中であり、国家意識が目覚めてきた時期でもある。しかしそれ以後もまだ英語はフランス語に比べて語彙が少ないなど劣等の言語とされたので、フランス語の作品を英語に直すことは先駆的なことだった。
- * **G96-104** G版ではこの時点で詩人は家に帰り、横になって夢を見る。F版では 200 行以下までこの行動は生じない。ロウズ (Loves) はこうしてG版のほうがF版より統一がとれていて言葉の繰り返しを避けているので、G版は改訂版であると論じる。
- * **F108** F版では5月初日になっているのに、G版 (G89) では5月の終わりごろに日付が変わっている。
- * **F113** アゲノールの娘 *Agénore's doghtre* ギリシャ神話のエウロペ *Europa* のこと。ゼウスはフェニキアの王アゲノールの娘エウロペを愛し、白い牡牛に変装して彼女をその背に乗せてクレタ島まで連れ去った。ヨーロッパ大陸の名は彼女に由来する。なおオウィディウス Ovid 『変身物語』 *Metamorphoses* 2: 858 ではエウロペのことを *Agénore nata* (娘) と呼んでいる。
- * **F114** あの獣 牡牛のこと、ここでは牡牛座 (金牛宮)。太陽は4月12日ごろ牡牛座に入った。5月1日には太陽は牡牛座の20度ぐらいにあっただろう。古代からコペルニクスの時代までの宇宙構造理論は、不動の地球を中心にした天動理論だった。古代の天文学者は太陽系天体の位置を表すのに、大空を12等分に分け、帯状にして固定した。これを黄道帯 (獣帯) と呼び、それを背景にして全天体は地球の周りをまわり、全惑星は黄道をはさんで両側に等しくおいた12度幅の黄道帯の中を動くこと

が分かった。そして黄道帯を春分点から黄道に沿って 30 度ずつ 12 等分し、12 等分したそれぞれには、地球から見て、それぞれの中にあるように思われた星座にちなんだ名前がつけられた。それが黄道十二宮である。最初の宮は白羊宮とされ、黄道が天の赤道と交差する点、太陽が赤道をその南側から北側へ通過する点＝春分点、つまり昼と夜の長さが同じ日＝春分の日、太陽がその白羊宮に入るとされた。春分の日は中世では誤って計算されていて、今日の 3 月 21 日ではなく 3 月 12 日である。太陽はおよそ 365 日で地球を一周することがすでに知られていたため、太陽が一つの宮を通過するのに 1 か月要することになる。したがって太陽は 3 月 12 日に白羊宮に入り、4 月 11 日に出ることになる。なお、黄道十二宮とその星座（かつこ内）の順序は次の通りである。白羊宮（牡羊座）、金牛宮（牡牛座）、双子宮（双子座）、巨蟹宮（蟹座）、獅子宮（獅子座）、処女宮（乙女座）、天秤宮（天秤座）、天蝎宮（蠍座）、人馬宮（射手座）、磨羯宮（山羊座）、宝瓶宮（水瓶座）、双魚宮（魚座）である。

胸 *breast* チャーサーが「胸」*breast* という語を使ったのは、牡牛座（金牛宮）の真ん中（15 度）よりむしろ宮の真ん中の部分を明示するつもりだったように思われる。

* **F123, G111** それ 雛菊のこと。香り イギリスの雛菊は芳香性の花ではない。また一般的に雛菊には香りはない。雛菊の芳香の属性はフランスの雛菊 *marguerite* 詩から引き継いだ詩的作法である。雛菊詩の芳香の属性は薔薇の慣例的な引喩から移されたにすぎないともいわれる。また匂いのない雛菊に芳香があるとみなすのは宮廷風文学の常套の手法である。

* **F153-74** この小鳥たちについての段落は、G 版では雲雀が愛の神の到来を告知する 5 行（139-43）に取りかえられた。

* **F154** 小鳥 *the tydif the small bird* の種類なので「小鳥」と訳した。この語は『カンタベリー物語』*The Canterbury Tales* 「近習の話」648 に *the tidives* として再び見られる。シジウカラ属に属する小鳥とか、小型のフクロウとされたり、*MED* では移り気や不義を連想する鳥、カッコウ、ヤツガシラとされたりしている。決定的な小鳥の種類は分からない。

* **F162** 〈無邪気〉*innocence* 頭文字は小文字だが、抽象的概念の擬人化 *Innocence* と解するほうがよいと思って 〈 〉を付して擬人化した。なお、Fisher 版では *Innocence* としている。

* **F165** 『倫理学』 アリストテレス *Aristotle* 『ニコマコス倫理学』*Nicomachean Ethics* を間接的に言っているのだろう。

* **F166** 中庸は徳の源 アリストテレスの倫理学で、彼の徳論の中心となる概念。アリストテレスは中庸の概念を過超（過大）と不足（過小）に対する均整とし、倫理的徳の本質的属性とした。したがって中庸を、本性として最善の徳（たとえば真実）と考え、過超（たとえば真実に対する虚飾）も、不足（たとえば真実に対する卑下）も悪徳とした。徳は正しい中間（中庸）を発見して、これを選ぶことにあるとした。もともと、中庸は古来、洋の東西を問わず、重要な人間の徳目の一つとされた。

* **F171** ゼピュロス *Zepherus* ギリシャ神話における西風の神 *Zephyrus, Zephyr* のこと。アストラエウスと曙の女神アウロラとの子。ローマ神話のファウオーニウス（西風の神）と同一視された。そこから春の温暖で、穏やかな風、西風とされた。ギリシャのニンフであるクローリスの恋人であり夫である。その後クローリスは春の女神フローラに変身したとされる。

フローラ *Flora* イタリアの豊穡と春と花の女神。ゼピュロスの恋人。ゼピュロスと交わりカルポス「実り」を生んだ。前注に記したように、オウィディウスによると、本当はクローリスというギリシャのニンフで、ある春の日にゼピュロスにさらわれ、二人は結婚し、神は彼女に花を支配する力を与えたとする。なお、現代英語の普通名詞 *flora* は「植物相」を意味し、*flower* 「花」の方はラテン語 *flos* 「花、開花」に由来する。

F171-74 『公爵夫人の書』402-3 参照。

* **F180** 「ダイジーエ」つまり「日の眼」*dayesye* 古英語 *daegeseage* (= *eye of day*) に由来する。上掲注 F / G42-43 参照。

* **F188-96, G71-80** ロウス教授は、F188-96 と G71-80、F197-211 と G93-106、F276-99 と G179-202 を比較し、F 版の方が初期のものであると結論づける。

* **G160** 百合の花 F 版の「太陽の冠」が G 版では「百合の花」に取って代わっている。このプロローグを寓意的と考える人たちは、これは G158 の「緑の小枝」と同様に「百合の花」はリチャード二世を暗にほめかしていると解釈する。その他いろいろの説が述べられているが確たる証拠はない。

* **G179-202** F276-99 参照。G 版が改訂版とするならば、この取り替えは愛の神の厳しさとアルセステの優しさとを結びつける利点をもっていると、ロビンソンはいう。

* **F195, G79** この事、この仕事 事は詩、仕事は詩作のこと。別の酒樽 *another tonne a different matter* 「別問題」のこと。

* **F197-211** G93-106 比較参照。

* **F206** 新来の夏 イギリスでは夏は 5 月、6 月、7 月とされ、最も快適な季節とされる。「この夏のある一日」G90 参照。

* **F212** 〈愛の神〉 ローマ神話のクピドのこと。クピドとは「欲望」を意味するラテン語からきている。ギリシャ神話のエロスに当たる。アモルとも同一視される。一説ではアフロディテ（=ウエヌス）とアレス（=マルス）との間から生まれたといわれている。G313 参照。弓矢を持つ無責任な「天使童子」として描かれるようになったのはアレクサンドリアの影響による。

* **F213** クピドは雛菊に似せた服装をしたアルセステを導く。彼女の名前は F432 で明らかにされるが、チャーサーは、おそらく不注意によるのであろうが、語り手が F518 まで彼女を何者であるか知らないままにして描いている。この書き間違いは両版にある。G 版ではアルセステの名前は G422 であらわれる。しかしこの一節は脇台詞と見なされるかもしれないが、それから後に続く事柄とは必ずしも一致しない。

* **F216** かわいい花びら ここでは *flourouns* となっている。これは *MED* によると、'little flowers, ?petals' の意とある。ボー *Baugh* によると、正式には「小さな花々」の意味だが、この語は中英語ではチャーサーしか使っていないのである（この行と F220 行、F827 行の三箇所）。しかしながらフロアサルは『雛菊の花の物語詩』(*Dittie de la Flour de la Margherite*) (166、187) において花びらの意味でこれを二度使っており、チャーサーが恐らくこの語を見つけたところはここなので、チャーサーは同じ意味でこれを使っているのかもしれないという。

* **F237, G169** 愛の神 *he* この人称代名詞 *he* は愛の神クピドのこと。チャーサーはクピドを盲目と見ていないようである。古典文学においてはクピドが盲目であることはまれであったし、古典美術においては決して盲目ではなかった。クピドの属性に盲目を加えることを決定的にしたのは、イギリスの修道士アレグザンダー・ネッカム（1157-1217 年）の後継者たちである。

* **F248, G201** 次の歌 *This song*, このバラッド *This balade* バラッド *ballad* は、*rhyme royal* (帝王韻) の三つのスタンザ *three stanzas* からなり、各スタンザの終わりに一行はリフレイン *refrain* になる、時にはエンヴォイ *envoy* と称する第四のスタンザが付くことがある。チャーサーのバラッドとしては、『運命の女神』*Fortune*、『真実』*Truth*、『高貴な振舞い』*Gentillesse*、

『節操の欠如』 *Lake of Stedfastnesse*、『不実な女性たちに対して』 *Against Women Unconstant*、『ウェヌスの哀訴』、『財布へのチョーサーの哀訴』 *The Complaint of Chaucer to His Purse*、『ロザモンドへ』 *To Rosemounde* などがある。ここのバラッドに挙げられている人物は、アブサロムとヨナタン以外すべて女性である。そしてバラッドに挙げられた人物のうち、この『善女列伝』 *The Legend of Good Women* で語られている人物（女性）は、ルクレティア、クレオパトラ、ティスベ、ディド、ピュリス、ヒュプシピュレ、ヒュペルムネストラ、アリアドネだけである。

* **F249, G204** アブサロム Absalon, Absolon 聖書のダヴィデ王の気に入り息子 Absalom。イスラエルで最も美しい男と称えられた。尋常でない髪を持ち主として知られ、髪は重くなりすぎ、毎年の終わりに刈られて計量された。ダヴィデ王の議官だが王に背いたアブサロムの顧問アヒトペルは、ダヴィデに背くよう勧め、謀反計画を授けた。しかしアヒトペルは自分の提案が実行されなかったことを知ると、自分の家の中を整え、首をつって死んだ。ダヴィデの甥ヨアブによって反乱を終了させられたアブサロムは、ラバに乗って逃亡したが、髪が樅の枝にひっかかって動けなくなり、ヨアブと彼の部下たちに見つけられて殺された。ダヴィデは彼の死を「ああ、アブサロム、わたしの息子よ、わたしの息子よ」と嘆き悲しんだ。「サムエル記下」14-18章。ここではアブサロムは美しい金髪を持ち主として記されているが、中世ではそれは常套句だった。

* **F250, G204** エステル Ester 『旧約聖書』「エステル記」のヒロイン Esther。ペルシャの王クセルクセス（アッシュユエルス）は、王妃ワシュティと離婚して、エステルを妻に選んだ。王は彼女がユダヤ人であることを知らなかった。総理大臣のハマンは王国内のユダヤ人すべてを殲滅する布告を発するよう王を説き勧めた時、エステルは叔父モルデカイに助言されて、エステルは王に自分がユダヤ人であることを明らかにしたので、王は布告を変更する許可を彼女に与えた。こうしてエステルは同胞の危機を救った。「エステル記」は歴史性に乏しく、エステル自身もまた、物語中の人物にすぎない。つまり美しさと礼儀正しさによってクセルクセスを高潔な行動に導いたとされる。『公爵夫人の書』(986-87)では優しさの模範とされ、『カンタベリー物語』「豪商の話」(1744-45)では従順のそれとされている。

* **F251, G205** ヨナタン Jonathas 『旧約聖書』のイスラエル最初の王サウルの長男 Jonathan。ダヴィデに対する篤い友情の持ち主。ダヴィデとの友情は、私心のない友情の最高の形として David and Jonathan (刎頸の友) という格言になった。「サムエル記上」19章参照。〈サウルの息子ヨナタンは…ダビデにこのことを告げた「わたしの父はあなたを殺そうとねらっている。朝になったら注意して隠れ場にとどまり、見つからないようにしていなさい」(19:112)〉(新共同訳『聖書』より)。

* **F252, G206** ペネロペ Penelopee, Penelope ギリシャ伝説のオデュッセウスの妻 Penelope。夫がトロイア戦争に出征中に多くの男性に言い寄られたが、舅の衣を織り終わるまでは求婚に応じないと称し、昼間織った布を夜ひそかに解いていた。そのうち20年経過して夫が帰って来て求婚者を殺してしまった。古典文学と中世文学において操の固い妻の典型とされた。

マルキア・カトー Marcia Catoun 古代ローマの小カトー(Marcus Porcius Cato Uticensis) (紀元前95-46年)の妻か娘のどちらかで、両方とも Marcia と呼ばれた。そして両方とも善女の見本として有名だった。ラウンズベリー(T. R. Lounsbury)は、チョーサーは小カトーの妻マルキアのことを知っている、という。妻マルキアのことをさすならば、小カトーは、彼女を友人に不承不承譲り渡したが、友人が死ぬと、彼女は前の夫の許に戻るということをしたのである。

* **F254, G208** イゾルデ Ysoude アーサー王伝説のアイランド王の娘 Iseult。コーンウォール王マルクは彼女の髪に惚れ込み、甥のトリスタンをその髪を持ち主を見つけるように送った。トリスタンはアイランドに到着し、ドラゴンを退治するが傷つき、女王と娘イゾルデに治してもらった。イゾルデはトリスタンの美しさに悪く思わなかった。王は娘イゾルデに、トリスタンを伴ってコーンウォールへ行き、マルクの花嫁になるように命じた。航海の途中トリスタンとともに魔法の媚薬を飲み、二人は取り返しのつかぬ恋に落ちた。この物語が初めて文学版になったのは恐らくアングロノルマン語によるもので、1150年頃作られ、1160年頃にウェールズの詩人トマスが宮廷風恋愛の物語にした。

ヘレナ Eleyne ギリシャ神話の絶世の美女 Helen。ゼウスとレダの子。スパルタの王メネラオスの妻で妃。トロイアの王プリアモスの末子パリスに誘拐されてトロイアに連れ去られた。パリスの行為はギリシャ諸王の怒りを買って、ヘレナを奪還するために、彼らはトロイアを攻めた。彼女はトロイア戦争を引き起こす原因となった。ヘレナは中世の常套句だった。

* **F257, G211** ラヴィニア Lavinia, Laveyne ウェルギリウス『アエネイス』 *Aeneid* に出てくるラティウムのラティヌス王の娘 Lavinia。初めルトゥーリ人の王トゥルヌスの許嫁であったが、後にラティウムにきたアエネアスに嫁した。そのためにトゥルヌスはラティウムに宣戦布告したが、アエネアスに殺される。彼女はラテン都市ラヴィニウムの名の由来となった。

ルクレティア Lucretia 古代ローマ時代の紀元前6世紀後期の人 Lucretia、英語名 Lucrece。執政官ルクレティウスの娘であり、ローマの貴族でローマ軍の士官タルクィニウス・コラティヌスの妻。コラティヌスの従兄弟セクトゥス・タルクィニウスに凌辱され、恥じて自分の身を刺し、死んだ。シェイクスピアの叙事詩 *The Rape of Lucrece* はこの物語を扱ったものである。ルクレティアの高潔は中世では常套句だった。彼女の話は第5話で語られる。

* **F258, G212** ポリュクセネ Polixene トロイア王プリアモスの娘の一人 Polyxena。トロイア物語の中世の校訂本によると、アキレウスは武器を帯びないでトロイアに赴き、彼女と恋に落ち、結婚を申し出た。彼は求婚の話し合いをするために、テュンブラのアポロンの神殿でパリスとヘカベーに会うことにしたが、代わりに待ち伏せに遭って殺された。ポリュクセネはアキレウスの霊に要請され、アキレウスの墓の上で犠牲として殺され、死後アキレウスと再会した。『変身物語』13:448参照。

* **F259, G213** クレオパトラ Cleopatre 古代エジプトの女王クレオパトラ七世(紀元前68-30年)。プトレマイオス二世の娘。魅惑的な容貌と権勢欲に燃えた女性だった。多くの恋人をもち、カエサルおよびアントニウスとの恋物語は有名である。『アエネイス』8:675-713。チョーサーは性愛に殉じた聖女の一人として名を挙げた。彼女の話は第1話で語られる。

* **F261, G215** ティスベ Tisbe, Tysbe ギリシャ・ローマ伝説のバビロニアの乙女 Thisbe。隣人のピラモスと相思相愛になったが、両方の両親に結婚することを反対され、二人は一緒にバビロンを離れる計画をし、まずニヌス王の墓で会うことを決めた。ティスベの方が先に着いたが、血に汚れた雌ライオンの出現におびえ、マントを置き忘れたまま墓の中に逃げ込んだ。雌ライオンはそのマントを血に汚れた口で引き裂いた。遅れてやって来たピラモスは血に汚れたマントを見て、ティスベは殺されたと思い自殺した。墓から戻ったティスベは、ピラモスの死を見てピラモスの剣で自殺した。彼女の話は第2話で語られる。

* **F263, G217** ヘロー Herro ギリシャ伝説の女神アフロディテに仕えた女神官 Hero。彼女の話は毎夜ヘレスポントス(ダーダネルス海峡)を泳ぎ渡って彼女に会いに来た。しかしある嵐の夜ヘローの塔の灯火が消えて見えなかったために、レアンドロスは溺れ死んだ。するとヘローも後を追って、海に投身自殺した。「弁護士の話の紹介」69において、弁護士はこの物語をチョーサーの作品『クピドの聖徒伝』の聖徒の目録に挙げているが、『クピドの聖徒伝』の別名であるこの

『善女列伝』にはヘーローの物語は入っていない。マーローの抒情詩に『ヒーローとリアンダー』がある。

ディド Dido ローマ伝説のフェニキアのタイアの王ベラスの娘。カルタゴの伝説上の創始者。フェニキアではエリッサとして知られたが、カルタゴではディド（放浪者の意）と呼ばれた。『アエネイス』ではアエネアスがトロイアから逃れてカルタゴに来た時、彼と恋に落ちたが、アエネアスが夜ひそかに彼女の許を去ったことを知ると、彼の剣でもって自殺した。オウィディウスの説明は中世ではディドに対する同情を引き起こした。彼女の話は第3話で語られる。

ラオダメシア Laodomia, Laodomia ギリシャ伝説のトロイア戦争でヘクトルのために殺されたプロテシラオスの妻 Laodamia。結婚したばかりの夫がトロイアで戦死したという報を受けて自殺した。ヒエロニムスは貞節な妻の中に入れて彼女のことを述べている。この話はオウィディウス『名婦たちの書簡』*Heroides* 13でも語られているが、チョーサーはこの列伝に入れていない。しかし『カンタベリー物語』の弁護士を紹介のリストにある（「弁護士の話の紹介」71）。

* F264, G218 デモボン Demophoun ギリシャ神話のアテナイの王テセウスとファイドラの子 Demophoon で、トロイアからの帰途、嵐に遭い、漸くトラキアに辿り着き、王女ユリスに歓待され、船の修理もしてもらった。そしてピュリスと結婚を約束した。しかしいったんアテナイに戻ると、彼女のことをすっかり忘れてしまった。

ピュリス Phyllis トラキアの王シソンの娘 Phyllis で、デモボンに恋したが、裏切られて絶望のあまり縊死した。死後ハタンキョウ（巴旦杏）の木に変えられた。彼女の話は第8話で語られる。

* F265, G219 カナケー Canace ギリシャ神話の風の神アイオロス、あるいはテッサリアのアエオリアの王アイオロスの娘 Canacee で、兄マカレウスに恋をし、男の子を産んだ。アイオロスはこれを見つけ、その子を遺棄するように命じた。それからカナケーに自ら命を絶つようと剣を送った。兄妹の不自然な愛の物語は『名婦たちの書簡』11とガウアー『恋する男の告解』*Confessio Amantis* 3: 147-360で語られている。チョーサーは、ここでは彼女を他の女性をしのぐ女性たちの中に入れていられるけれども、「弁護士の話の紹介」（78以下）では主題に不相当としているように、彼女の話を書くつもりはなかったようである。「顔つきから見抜かれた」という言葉は、類推として、『名婦たちの書簡』(11: 33-36)に、カナケーの妊娠を乳母が彼女の顔つきから見抜いたという記述がある。〈年寄りの女の察しのよさから、私の悩みを最初に感づいたのは私の乳母でした。乳母はまずこう言いました「王女様、あなたは恋をしておられますね。」私は思わず顔を赤らめ、恥ずかしくなって胸に目を落としました。私は一言も答えませんでした。これが白状したことになりうるほどの様子になりました〉(笹本訳)。

* F266, G220 イアソン Jasoun ギリシャ伝説のテッサリアのイオルコスの王アエソンの子 Jason。叔父ピーリアスに王位を奪われ、カイロンに逃れて成長し、帰国して王位の返還を求めたが、王位と引き換えに黄金の羊毛をもたらすことを命じられた。そこでアルゴナウティカを率いてコルキス島に赴き、注文の品を手に入れてテッサリアに帰ると、父はすでに叔父に殺されていた。イアソンは妻のメディアが呪術に長けているのを利用して、叔父を若返らせると称して大釜で煮殺したので、叔父ピーリアスの子が怒って、二人を国外に追放した。イアソンはコリントに逃れ、メディアを捨ててクレウサと結婚する。

ヒュプシピュレ Ysiphile ギリシャ伝説のレムノス島の王トアスの娘 Hyppisyle。レムノス島の女たちは男たちがトラキアの奴隷女たちと交わったことを怒って、女たちは島の男たちを皆殺しにして仕返しした。しかしヒュプシピュレだけは父親を殺さずに船に乗せて島の外に逃して父親を救った。その後女王の座についた。アルゴナウティカがコルキス島に赴く途中、レムノス島にやって来た時、彼女は彼らを堂々と歓待し、イアソンと恋に落ち、二子をもうけたが、イアソンはコルキスに着くと彼女を裏切った。コルキスでメディアと結婚の約束をし、レムノス島には戻らなかった。彼女の話は第4話で語られる。

* F268, G222 ヒュペルムネストラ Ypermystre ギリシャ神話のアルゴスの王ダナウスの50人の娘の一人 Hypermnestra。彼女は従兄のリンケウスと結婚した。夫を殺すように父から命じられていたが、姉妹たちの中で彼女だけが父の命に逆らって夫を殺さず、リンケウスの逃亡を助けたので、父に幽閉された。彼女の話は第9話で語られているが、話が途切れている。

アリアドネ Adriane Ariadne のこと。ギリシャ神話のクレタ島の王ミノスとパシファエとの間の娘。アテナイの王子テセウスが怪物ミノタウロスを退治するためにクレタ島にやって来た時、彼と恋に落ちた。彼女は彼に糸玉を持たせてやったことにより彼の命を助けた。彼は怪物の住む迷宮に糸を伸ばしながら入り、怪物を倒して、帰りには糸を頼りに迷宮の入り口に戻って来たのである。その後彼女は彼とともにクレタ島を去ったが、彼はナクソス島に彼女を捨てて去った。パッコスには彼女を哀れに思い、妻にした。神々は彼女の冠を星々のなかに置いた。彼女の話は第6話で語られる。

* F276-95 G179-98 比較参照。

* F283, G186 19人の女性 チョーサーは「性愛に殉じた聖女」を19人とする予定であったことがうかがわれる。

* G247 わしのしもべたち 恋人たちのこと。

* G261-63 『カンタベリー物語』「パースの女房の前口上」707-10 参照。

* G264-65 チョーサーが1381年頃から1387年頃に書いた『トロイルスとクリセイデ』*Troilus and Criseyde* をさす。

* G268-312 本に関する記述はG版のここにおいてのみ生じる。

* G274 60冊の新旧の書物 60冊はユーモラスな誇張とみなすべきだろう。一つの主題について書かれた60冊もの本は、たとえ60は概算であっても、膨大な個人蔵書を暗示しているであろう。『カンタベリー物語』「ゼネラル・プロローグ」294参照。

* G277 ちなみにソロモンは「千人に一人という男はいたが、千人に一人として、良い女を見いださなかった」（「コヘレトの言葉」7: 28）と言っている。この言葉をチョーサーは『カンタベリー物語』「メリベウスの物語」1057で引用している。

* G280 ウアレリエ Valerye これはイングランドでは『ウアレリエ』として知られるウエルズ人の聖職者ウォルター・マップ Walter Map (1140頃-1209年頃)によって書かれた書物、『哲学者ルフィヌスに対して結婚するなというウアレリウスの忠告』*Dissuasio Valerii ad Rufinum philosophum ne uxorem ducat* のことである。中世期にはこの忠告（諫止）書は、何人かの学者たち（ニコラス・トレベットも含まれる）によって、中世の歴史家ウアレリウス・マキムスの作品であると信じられた。この作品は結婚の不利益を詳説し、結婚する男にふりかかる不幸について説明している。にもかかわらずベネロペ、ルクレティア、サビーニ人の女性たちを称えている。「パースの女房の前口上」671参照。Valeryeはラテン語 Valeriusの英語異形。

ティトゥス Titus ローマの歴史家ティトゥス・リウィウス Titus Livius (紀元前59-紀元後17年)のこと。ルクレティアの物語を書いた。チョーサーは後の記述箇所1683行でルクレティア伝の典拠として示している。

クラウディアヌス Claudyan これはラテン語 Claudianusの英語異形である。ローマ帝国末期の詩人クラウディウス・クラウディアヌス Claudius Claudianus (395-404年)のこと。アレクサンドリアで生まれたギリシャ人で、若い皇帝ホノリウスの公認詩人になった。多くの詩作をしたが、そのうち神話詩『プロセルピナの凌辱』*Rape of Proserpine*は代表作である。

彼は死後 200 年間人気作家の地位にあったが、その後知られなくなり、12 世紀に再び彼に対する興味がフランスとイングランドで再燃した。チョーサーは恐らく彼が皇帝の名将ステリコの誠実で貞淑な妻について書いた詩 *Laus Serenae* を覚えていたのであろう。この詩は貞節に尽くした女性たち（ルクレティア、アルセステ、ペネロペも含まれている）も称えている。

* **G281** ヨウニアヌスに反論したヒエロニムス Jerome agayns Jovynyan ヒエロニムスはラテン教会の教父聖ヒエロニムス Jerome (saint) (347 頃-420 年頃) のことで、ラテン語訳聖書ウルガタの著者。これはヨウニアヌス Jovinian と呼ばれる修道士の聖職者の結婚の擁護と処女性の軽視に対する返答として『ヨウニアヌスに反論する書簡』*Epistola adversus Jovinianum* という書物を書いた。「パースの女房の前口上」675 参照。しかしながら、この作品も貞淑な女性たちを称賛しているため、チョーサーは、『カンタベリー物語』「大地主の話」1355-1456 におけるドリゲンの不平はこの作品に依拠している。もっとも、ドリゲンの不平はこの G 286-304 で述べられている例の多くについてのことであるが。ヨウニアヌスはヒエロニムスと同時代の 4 世紀の修道士で、聖職の禁欲主義や独身主義に反対する論文を発表し、マリアの永遠の処女性の教えに疑問をもった。

* **F286, G189** アダム キリスト教伝説では、天地が初めてできた時に神が最初に造った男である。人間の始祖とされる。イヴの勧めで、禁断の知恵の木の実を食べて共に楽園を追われた。「創世記」第 2 章、第 3 章参照。

* **F329, G255** 『薔薇物語』the Romance of the Rose 中世フランスの教訓寓意詩。第 1 部はギョーム・ド・ロリスによって 1225-40 年に書かれ、宮廷趣味の恋愛作法を幻想的に描き、第 2 部はジャン・ド・マンによって 1275-80 年に書かれ、愛欲的恋愛観について社会批評を交えて展開した。(愛の神) はここでチョーサーがこの作品を翻訳したと述べているが、実際にこの作品を訳し終えたかどうか分からない。現存する中英語の翻訳本はチョーサーが完全に訳したものなのか、それとも一部か、それとも全然訳したものでないのか分かっていない。1366 年頃この作品の一部をチョーサーが訳したとするのが妥当であろう。

* **G305** オウィディウスの書簡体作品 オウィディウス Publius Ovidius Naso (紀元前 43-紀元後 17 年頃) はローマの第一流の詩人。彼の書簡体作品とは『名婦たち』*Heroides* または『名婦たちの書簡』*Heroidum Epistulae* のこと。これは 30 歳代前半の作で、エレゲイア律 (六脚律と五脚律の二行連句を連ねたもの) による手紙の形式で書かれた典型的な恋愛詩である。この書は一般に *Heroides* の題名で伝わる。*Heroides* はギリシヤ語 heros (神話・伝説の英雄) の女性形 (複数) で、ギリシヤ神話・伝説に登場する有名な婦人たちの意である。そういうわけで、これはこれらのヒロインたちが恋人や夫に宛てて書き送ったという想定のもとに書かれた 21 篇の書簡集である。

* **G307** ヴァンサン Vincent 13 世紀のフランスのドミニコ会修道士ボヴェのヴァンサン Vincent de Beauvais のこと。彼はルイ九世の宮廷に重んじられ、教師を務め、学問上の顧問になった。当時の広範な知識を集めた百科事典 *Speculum majus* 『大いなる鏡 (鑑)』を著した。*Speculum Naturale* と *Speculum Doctrinale*, *Speculum Historiale* の 3 部から成っている。

『歴史の鏡』 チョーサーは Estoryal Myroure と綴っているが、ラテン語のタイトルは *Speculum Historiale* である。つまり『歴史の鏡 (鑑)』のこと。チョーサーはこの作品にいく分詳しいことを示し、「クレオパトラ伝」の種本に使っている。

* **G312, G529** 『カンタベリー物語』「女子修道院付き司祭の話」3443 参照。

* **F338** 聖ウエヌス 聖女のような扱われ方はおそらく伝承的なものであろう。「パースの女房の前口上」604 参照。

* **F352** 当時の宮廷の諷刺であろう。「女子修道院付き司祭の話」3325-26 (ああ、皆さん、嘘つきのおべっか使いは、宮廷にはたくさんいますよ) (笹本訳)、チョーサー訳『薔薇物語』1050 (彼女の宮居には教多の太鼓持ちが居り) (境田進訳) 参照。

* **F358-360, G333-36** ダンテ『神曲』「地獄篇」13: 64-7 から採っている。そこには (およそ帝王の座にはいつも淫蕩なながし目を送る売女はつきもので、宮廷を悪に染め、世間を死をもたらすものだが、その女が皆をたきつけて私にそむかせた) (平川祐弘訳) とある。ダンテは「嫉妬」を「売女」meretrix と称しているが、チョーサーは「洗濯女」lavender (= laundress) に変えている。lavender はまた one who washes dirty linen に連想が及ぶ。これは文字どおりに「汚れた下着を洗う人」だが、実は「内輪の恥をさらす人」の意味である。二重の意味を連想させる見事な手際は、チョーサーのほうがダンテよりも上である。「カエサル館」とは「帝王館」のこと、つまり高官の館を象徴している。ダンテ (1265-1321) はイタリアの詩人。

* **F375, G355** ロンバルディアの暴君たち 13-14 世紀のミラノその他のロンバルディアの政治的騒乱は、おそらくすでに天下周知のことになっていたのだろう。14 世紀のロンバルディアは、暴君たち、とくにミラノのベルナーボ・ヴィスコンティ Bernabó Visconti のために、評判が悪かった。チョーサーは 1378 年 5 月から 9 月にかけて、ベルナーボ・ヴィスコンティとイタリアの傭兵隊長でイングランド人のジョン・ホークウッド John Hawkwood と外交交渉をするために、イタリアへ二回目の旅 (ミラノへは最初の訪問) をしたことが記録されている。この時までにチョーサーは、フィレンチェが衰えつつあった「連合政策」とミラノによって代表される上昇するイタリアの貴族の独裁政治との間の対照を、鋭敏に知るようになっていたであろう。この G 353-88 行記述のロンバルディアの政治は、1378 年のヴィスコンティの宮廷とのチョーサーの出会いと、ペトラルカ Petrarch がまだ若い頃「ロンバルディアの暴君たち」との付き合いをチョーサーが知っていたことに負うところが大きい。『カンタベリー物語』「神学生の話」64-84、「修士の話」2399-406 参照。

* **F381, G365** かの哲学者の意見 かの哲学者とはアリストテレスのこと。アレキサンダー大王への進言。チョーサーの友人ガウアーも『ニコマコス倫理学』第 5 巻の王たちに対するアリストテレスの忠告を引用している。『恋する男の告解』第 7 巻参照。ともかくアリストテレスは中世では典型的な哲学者だった。

* **F388-90** 王論についての常套句。ガウアー『恋する男の告解』7: 2743-44 (金持ちにも貧乏人にも例外なく公平に法を適用すべきである) (伊藤正義訳)。

* **F417, G405** 『名声の館』the Hous of Fame チョーサーが 1375-7 年に書いたと思われる夢物語詩。現在は未完で残存していて、完成作かどうか不明。

* **F418, G406** 『公爵夫人ブランチの死』the Deeth of Blaunche the Duchesse チョーサーが 1368 年に書いた夢物語詩。ランカスター公爵夫人の死を悼んで書いたとされる。現在は『公爵夫人の書』として知られている。

* **F419, G407** 『鳥の議會』the Parlement of Foules チョーサーが 1380 年頃書いたと思われる夢物語詩。

* **F420, G408** 『テーベのパラモンとアルシーテ』の愛 the love of Palamon and Arcite パラモンとアルシーテとエメリーをめぐる彼らの恋愛騒動。1380 頃-81 年の作と思われる。この作品そのものは残っていないが、のちに『カンタベリー物語』「騎士の話」になって生まれ変わった。

* **F422-23, G410-11** バラッド、ラウンドル、ヴィルレーと呼ばれる…讃歌 チョーサーが書いたこれらの詩形の詩は現在大

部分失われている。バラッド バラッドについては上掲F248 注参照。チョーサーには愛の神の祝祭日のための讃歌 hymns (底本綴字 ymynes) と正式に呼べるバラッドは3つか4つしかない。ラウンドル ラウンドルはロンド一体の変形で二個の折り返し句(refrain)をもつ3連11行詩で、押韻形式はabaC, bab, abaC (大文字は繰り返し)である。チョーサーが作った roundel の例としては、『鳥の議会』の680から始まるものがあり、三重のラウンドル triple roundel の例としては『つれない麗人』*Merciles Beaute*がある。ヴィルレー ヴィルレーは一節二韻体の短詩のことである。14世紀にフランスで始められた形式の歌や短い叙情詩で、長短不同の行から成る連形式の詩形である。普通は一連に二つの脚韻をもち、連の最後の脚韻が次の連の主な脚韻になる形式をもっている。主としてチョーサーの時代と1575年頃から1610年までの時代と19世紀に流行った。チョーサーが作った例としては『アネリダとアルシーテ』*Anelida and Arcite*の256-332にあるが、典型的ヴィルレーではない。

* F425, G413 『ボエース』Boece チョーサーによるボエティウス『哲学の慰め』の散文訳。1380頃-86年に書かれた。

* F426, G416 『聖セシリア』の生涯 the lyf of Seynt Cecile この話は『カンタベリー物語』「第二の修道女の話」に採用されている。聖セシリア(?1230年頃)はキリスト教女性殉教者。ローマ教会で最も尊崇を集めた殉教者の一人。実在したかどうかかなり疑わしい。

* G414 教皇インノケンティウス三世 Pope Innocent (1161-1216年) イタリアのガヴィグナーヴォで生まれた。彼の父セグニ伯爵は彼をレタリオと呼んだ。1198年教皇になった時、インノケンティウスと名乗った。ローマ・カトリック教会の歴史で最も若い教皇の一人だった。教皇庁の強化および教皇領の失地回復を計った。

* G415 『人類の惨めな状態』について Of the Wreched Engendrynge of Mankynde 教皇インノケンティウス三世の著作 *De miseria condicionis humane* のこと。教皇になる以前にこの書をすでに書いていた。チョーサーはこの作品を全訳か部分訳をしたのであろうが、今は失われている。

* F428, G418 オリゲネス作『マリア・マグダレナ』*Origenes upon the Maudeleyne* オリゲネス Origenes (185頃-254年)は初期キリスト教最大の神学者。キリスト教信仰の擁護者であり、特に聖書の神秘的解釈の支持者だった。the *Maudeleyne* はオリゲネスの作と誤り伝えられている『マリア・マグダレナの説教』*Homily de Maria Magdalena* のことであろう。そこで『マリア・マグダレナ』とした。チョーサーのこの作品は現在失われている。

* F432, G179 かつてトラキアの王妃…アルセステ Alceste トラキアは現在のブルガリア南西部とギリシャとの国境にある、ロドペ山地辺りの北部ギリシャ地域の古名。アルセステはポセイドンの子でイオルカスの王ペリアスの娘で、テッサリアのフェライの王アドメトスの妻アルケステス Alcestis のこと。運命の三女神が夫のアドメトスを殺そうとしたが、アポロンが命乞いをしたので、三女神は彼の妻が夫のために命を落とすなら、夫の命を救すと約束した。そこでアルセステは夫の身代りになって死に、黄泉に降った。しかしヘラクレスによって黄泉から救い出された。アルセステは妻の道を全うする女の典型とされている。オウィディウスの『名婦たちの書簡』には出て来ない。古代ギリシャでは彼女の話が一般に流布したのは、エウリピデスの『アルケステス』である。その中では、ヘラクレスがタナトス(死の神)の手から彼女を取り戻すことになっている。チョーサーは愛の神の女王の名に当て、トラキアの王妃としているが、実はテッサリアの王妃である。犯罪者のために王妃が慈悲を請うという着想は文学ではよくあることであるが、実生活においても未知のことではない。

* F440, G430 『クリセイダ物語』*Creseyde, Crisseyde* チョーサーが1381頃-87年頃に書いた『トロイルスとクリセイデ』。

* F451-52 諷刺表現。「メリベウスの物語」1794-95に〈今日できる善は今日行ない、明日まで待ったり遅らせたりするな〉(笹本訳)とある。

* F464-65, G454-55 『カンタベリー物語』「近習の話」537 参照。

* F497 エルタム館かシーン館 この二つの館はリチャード二世とアン女王のお気に入りの王宮だった。エルタム館はロンドンからテムズ川上流7マイルのところにあった。歴代の王たち(ヘンリー三世(1270年)からジェームズ一世(1612年)まで)のお気に入りの住まいで、シーン館と交互に利用した。シーン館は今のリッチモンド宮の初期の名称である。エドワード一世(在位1272-307年)から1394年までの王の住まいだった。1394年にリチャード二世が少なくとも一部取り壊させた。残った建物も1499年に火災で破壊されてしまった。しかしヘンリー七世が壮大に再建し、この館の名を父エドモンド・チューダーから継承したリッチモンド伯爵の称号のためにリッチモンドに変えた。チョーサーは、完成した『善女列伝』をリチャード二世の最初の王妃ボヘミヤのアン(1394年6月7日死去)に届けるために、どちらかの館へ行ったかもしれない。この箇所は改訂版G版では削除されている。G版は改訂版であって、チョーサーは王妃の死後王妃に触れることを避けるために、この二行連句(F496-497)を取り除いたと仮定することは道理にかなうとされている。リチャードは王妃の死を大変悲しみ、王妃を少しも思い起こさないようにと、シーンの自分の住まいを完全に取り壊すように命じた。王の命令は完全に実行されなかったようである。ポーはこの二行連句によってアルセステとアン王妃を同一視することは不可能であると考え、ドナルドソンは、王妃に関して詩において寓意的レヴェルで存在することは可能であるとする。

* F500, G487 贖いを課されなかったこのお方 アドメトスの誠実な妻であるアルセステのこと。F432においてすでにアルセステの身分をあかしているの、F500-502、F487-89における質問は、奇妙であるが、チョーサーのうっかりミスであろう。改訂版であるG版(G488-490)でもF版(F500-502)と同じ間違いをしているのだから、チョーサーは気づいていなかったであろうか。なお、アルセステの物語はガウアーも語っている(『恋する告解』7:1917-43と8:2640-46、だがヘラクレスによる救助を省略している)。チョーサーはヒューギヌス『ギリシャ神話集』51カボッカッチョ『異教の神々の系譜』13:1などにおいてこの物語を見つけたであろうが、どれにも雛菊への変身に関するところはなく、おそらくチョーサーの創作であろう。

* F503 「騎士の話」1761 参照。チョーサーの好きな言葉。

* F505-6, G494-95 詩人は神の質問(F500-502, G488-490)に答えて、言われるまで彼女がアルセステであることを知らなかったかのように振舞うこととF518と、アルセステがすでに自分の名前を言ったF432との間の矛盾については、完全に言い逃れできるわけではない。この間違いはプロローグのF版もG版も両方の版に共通し、改訂版であるG版でも訂正しなかった。

* F510, G498 大箱 chestre をこう訳した。bookcase「本箱」のことである。中世では本は一般に収納箱に納められた。

* F511, G499 雛菊に変えられたアルセステ王妃 上掲注F500, G487 参照。

* F525, G513 アガトン Agaton (紀元前448頃-402年頃) 古代ギリシャ、アテナイの悲劇作家。エウリピデスやプラトンの友人。プラトンの『饗宴』においてアルケステス(アルセステ)の物語が語られている。だがそれにはアルケステス(アルセステ)が星になったという言及はない。チョーサーは、ここでは『饗宴』という代わりに、この作品は時々アガトンの宴

会として知られたということもあり、その登場人物の一人の名をとってアガトンと呼んでいるのであろう。

* F526, G514 ユピテルが彼女を星に変えられ ユピテルがアルセステを星にしたというのもチョーサーの創意であろう。

* F531, G519 女神キュベレ Cibella 中英語の異形である。ラテン語では Cybela あるいは Cybele である。神話のキュベレのことで、フリギアその他小アジア地方の女神。神々の母である大地の女神で the Great Mother of the Gods と呼ばれ、穀物の実りを表象する。多産の女神とされるので、雛菊を作ったといわれる。ローマ神話のケレス、ギリシャ神話のレアまたはデメテルと同一視されることもある。

* F533, G521 マルス Mars ローマ神話の戦争の勝利の守護神。戦争には血が連想されるから、この神の色は赤である。そこで F533 と G522 は雛菊の花びらの先の赤い色のことをいっているのである。下の 2589 参照。また「騎士の話」975 参照。

* F539-40 その歌の中にお妃の名を入れ忘れた F 版のバラッド (F249-69) にはアルセステの名はないが、G 版(G203-223) にはアルセステの名はある。そこで G 版にはこの叱責は削除されている。

* F549-50, G539-540 この 2 行はアルセステの物語がこの列伝の最後伝になることを暗示している。そしてチョーサーはアルセステの物語をこの列伝の最高の物語にするつもりだったようだ。

* F554-58 チョーサーは、初めはバラッドに挙げられている人物を取り上げて列伝の話をするつもりであったと考えられる。列伝には、男性をひとまず置いておくとして、女性はクレオパトラ、ティスベ、デイド、ヒュブシビュレとメディア、ルクレティア、アリアドネ、フィロメラ、ピュリス、そしてヒュベルムネストラが登場する。しかし彼女たちの中でフィロメラはバラッドに出て来ない。一方バラッドに名を列ねているが、列伝に列ねていない女性たちは、ペネロペ、マルキア、イゾルデ、ヘレナ、ラウィニア、ポリュクセネ、ヘーロー、ラオダメシア、カナケー、そしてアルセステである。そのうえこのリストは、「弁護士の話の紹介」で示した『善女列伝』の登場人物のリスト (61 以下) と一致していないのである。

* F558 チョーサーはここで原案のリストを変更するためにドアを開けている。

* F572 それを読んだり聞いたりする チョーサーはこの詩を黙読や音読だけでなく、朗読詩の役目も意識している。

参考文献

Baugh, A. C. (ed.), *Chaucer's Major Poetry*. New Jersey: Prentice-Hall, 1963.

Benson, Larry D. (gen. ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd Edition. Boston: Houghton Mifflin, 1987.

Fisher, J. H. (ed.), *The Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1977.

Gray, Douglas. *The Oxford Companion to Chaucer*. Oxford: OUP, 2003.

池上忠弘『14世紀のイギリス文学—歴史と文学の世界—』東京：中央大学人文研究所、2011.

地村彰之「Chaucerとヨーロッパ大陸の影響—本シンポジウムについて」『日本英文学会第88回大会Proceedings』、日本英文学会、2016、85-86.

榊井迪夫訳『完訳カンタベリー物語』（上・中・下）東京：岩波書店、1995.

榊井迪夫『チョーサーの世界』（岩波新書966）東京：岩波書店、1976.

宮田武志訳『善女物語』甲南大学文学会、1954。（『善女よもやま話』大手前女子学園（1982）こびあん書房（1987））

奥田宏子『チョーサー 中世イタリアへの旅』（神奈川大学評論ブックレット23）東京：茶ノ水書房、2003.

斎藤勇『カンタベリー物語—中世人の滑稽・卑俗・悔悛』（中公新書749）東京：中央公論社、1984.

笹本長敬訳『カンタベリー物語』東京：英宝社、2002.

笹本長敬訳『トロイルスとクリセイデ』東京：英宝社、2012.

A Japanese Translation of Geoffrey Chaucer's *The Legend of Good Women* (1)

Akiyuki Jimura and Hisayuki Sasamoto*

Department of Secondary Education, Faculty of Education, Okayama University of Science

**Formerly, Professor of Osaka University of Commerce*

(Received October 28, 2016; accepted December 5, 2016)

This article consists of three parts: (1) an introduction to Chaucer, (2) a Japanese translation of Geoffrey Chaucer's *The Legend of Good Women* and (3) the textual notes of *The Legend of Good Women*. Our translation is based upon Larry D. Benson's text (1987). The two edited texts of A. C. Baugh (1963) and J. H. Fisher (1977) are referred to when necessary. In the translation of Proper Nouns, katakana does not correspond to English pronunciation, but mostly the original language. We have not distinguished the long and short vowels of Greek and Latin, when using katakana. Personification of abstract ideas are shown in angle brackets < >. First, we have made the notes of F version, then G version added, when the notes of F and G are duplicated in this translation.